

石渡さと／nanakikae／内澤句子＋南陀楼綾  
繁／福永信＋法貴信也／円城塔→斎藤緑雨／  
海猫沢めろん／モブ・ノリオ／斎藤美奈子／  
青木純一＋倉敷茂／大杉重男／上野昂志／四  
方田犬彦／大久秀憲／池田雄一／生田武志／  
中森明夫／山本動物

¥0

日々

石渡さとこ

2年半ぶり WB  
送り出す新人の  
みずぎわは  
散文あるいは  
視線。

日曜の朝。洗面所でゆで卵の殻  
をむいて、殻が、排水口につまる。  
テレビをつける。各地の  
館はもう本編が終わって、時間になっ  
ていた。根津で平沢貞通展、獄  
死のテンペラ画家。テンペラって何  
だ。黄色い壁の建物に寄りかかり  
うすくまっている。大正っぽい着  
物の男の絵も映る。……

# 日々

## 石渡さと

家で寝てはいけませんよ、とわたくしは申し上げたのです。

——エーライ・ペテンスキー「一般野宿学講義」

日曜の朝。洗面所でゆで卵の殻をむいて、殻が、排水口につまる。

テレビをつけると、新日曜美術館はもう本編が終わって、各地の展覧会などを紹介する時間になっていた。根津で平沢貞通展、獄死のテンペラ画家。テンペラって何だ。黄色い壁の建物に寄りかかりうずくまっている、大正っぽい着物の男の絵が映る。

そのあと囲碁講座を、見てもいないがつけっぱなし。「こう押さえて、ここが下がるのが筋なんですけどね。はい、これを犬の顔と言います。馬の顔のがいいんですけどね。きりんの首というのもありますよ」と師匠が若い女の弟子に説明している。犬、馬、きりん、どんどん長くなっていくのか。テレビから離れていたの、犬の顔がどんなか見られなかった。

近くの喫茶店へ行く。目の見えないおばあさんが斜め向かいの席に座っている。店主がテーブルにコーヒーを置いていったあと、角砂糖のつぼを手でつつんで確かめながらふたを外している。私は自分の鞆に入っている黒い布の手帳を、盗み見るように薄く開く。そこには、初めてその人を見かけた時の様子が書きとめてある。「二月十一日、盲人をじっと見てしまう、いいことではないかもしれない」このあと食事の様子や、彼女と店主のやりとりが細かく続く。のたかった自分の字を見つめ、読まずに閉じる。食事が運ばれてくる。箸をつける。今度はおばあさんの方を見ることもない。

夜、歯を磨きに洗面所へ行ったら、排水口に卵の殻がつまっていた。指をつっこんでフィルターを外し、髪の毛と、がさがさした白い殻を捨てる。洗面台の暗い

円い穴から、ひよこが何羽かゴムみたいな柔らかさで、ぼっこ、ぼっこ、出てくるところを想像する。嘘、しない。私が今朝食べた。

月から土。宝飾展の準備で忙しい。社長に叱咤されてばかり。昼休みには近所のカレー。

ここでは真珠が貨幣に換わり貨幣が真珠に換わるという永久運動が行われており、選別台のところで背を屈め珠を選んでは数えしている社長は、長年それをやりすぎてるせいで、もう穴ぐらの動物に似てきた。などと思ってることが薄々ばれている。

世のものものは有限で、その取り分を決めるために人は皆してお金を稼ぐのか、と私は学校を出て働きはじめてから思ったはずだったが、いったい何の目処が立たずこの循環が続くのだろう。

社長はこないだ車も買い換えたというのに不機嫌。不景気の所為。しかしなぜ不景気にアウディ。商売仲間に電話して、そろそろ俺んとこ決算だから、クサレを分けてくれよと喋っている。クサレは腐れ玉。真珠層がうまく巻かれなかったりして、汚く、価値のないものことで、クズ、ドクズなども。漁師の言葉なので粗野なのらしい。なんで決算にいいのかな。あの、脱、間違えた、節税に寄与するのですね。

私は社長に何かの宗教の信者だと思われる。普段朝ごはんを食べてないと言うと、朝飯食わんで、何してんの、祈ってんの。と真顔で聞かれる。このごろ気がつくと一緒にふつと笑ってることが多いので、確かにやばい気もする。知らないうちに考えごとをしてみたいだ。でもたつた今何を考えていたのか、すぐ分からなくなる。物忘れも多いし、喫茶店ではいつも同じじつたてにぶつかると、会社の床のコードにひっかかって転ぶしで、色々ひどい。確実に毎日脳細胞は死んでいくのよう、とパートの丹野さん三十歳主婦に言われる。

丹野さんはときどき漫画を貸してくれる。こないだは人間の家で家政婦をする猫の話。流行ってるみたいだけど、読んだらあんまり。裏表紙を見たら五版。絵柄のかわいさばかりで流通してるんだ、お話なんかは別になーなーでもいいんだ、あー寂しい世の中だねえ、とちよつと独断気味に思った。人のこと言えないでも、面白かったですと言って返した。丹野さんは美人。

午後七時、勤めを終えてビルの外に出たら雨が降っていて、目は自然と軒下をさらってしまふ。会社の裏の屋根つき駐車場に目が二つ小さく光り、にやあにやあと二度鳴いた。近寄って行って屈みこむと、挨拶といった風に何度か体をすり寄せてから、くるりと背中を向けて座った。あとは何をしてもいい、猫は通行人を眺めたり、車のエンジンのかかる音に耳をそばだてたり、そのうちにあくび

をして自分の毛をなめはじめた。私はそれを見ている。手を伸ばしてそろりと背を撫でると、猫は身震いをして、さも厭そうに、二、三步私から離れたところに座り直す。先程とは打って変わった態度だ。触られるのが嫌いなのではなく、私の触り方を好かないんだと思う。なぜって、行きずりの人々に大人しく触られているのを何度か見たことがあるから。

しばらく猫を見ていたけど、駐車場は寒い。立ち上がるうとして、靴が地面のコンクリートに擦れる音がすると、猫は敏感にふりむいて、不服そうに私を見上げる。首をかしげて鳴き、帰るなというので、私はしゃがみ直す。猫は毛づくろいに戻る。私は暇である。小声で歌い始めてみると、猫の耳が立ち、また不機嫌そうに、にやっ、と短く鳴かれる。私は帰れないし、何かしても怒られるので、ずっと見ているだけになる。

そうやって、二十分ほど駐車場に座り込んでいる間、隣のビルのS急便の海老色の制服を着た男が何度か通って、その度に猫が毛づくろいをやめてにやあと鳴く。私は知らんふりして下を向いておく。S急便の人たちがこの猫に餌付けをしているのを知っている。それで猫は鳴くんだろう。

困るのは、私の会社では毎日Sに集荷に来てもらっていることだ。何人かは私の顔を見知っている。今、目の前を行き来する人は、うちに来たことがあるだろうか。目が悪いので、男の顔がよく判らない。

男がこちらへやってくる。背が高い。しゃがんで、大きな手で猫をわさわさと撫でる。猫は四足でしっかと立ち、手のひらに沿うように腰をのぼす。

「仕事、終わりですか」立ち上がった私を見上げて話しかけてきたのを、「ええ、はい」と言いながら後じさり、コンクリートの地面に放つてあった傘を引きずるように持ち上げ、これ以上何か言われる前に、そそくさと帰った。人のよさそうにまなざしに少しうろたえていた。

今の男は見覚えがあるようなないような、でも声の調子からすると面識があるのだろう。

大方、Sの全体にばれていると思う。あの会社の事務の人、たまに座り込んでナントカ（忘れてしまった、彼らがつけている猫の名前）のこと何十分も見るよね、変わった人、とか、そんな感じだ、きつと。

今朝は、お腹をすかせた手乗り猿に、つぶあんを与える夢を見た。猿はにこにこして食べていた。猿って笑うんだなと思った。

会社の昼休み、中華料理屋でレバと白菜炒めの定食を待ちながら、隣の卓の女性客二人の会話が聞こえる。私服だがOL風。「内縁の妻って、同棲ってこと？」「ちがうちがう。もっと色々あれだよ、法的にあるんだよ」「届け出るの？」「内縁の妻ですって」「いやいや、えっと。でも相続とかできるんだよ、うん」「えーで

も、結局何をすれば内縁の妻になるの」「……あつ、そうそう、フランスみたいな感じ。一生一緒にようねみたいなの。じゃ結婚しろよみたいな」「へーえ。ふーん……。いつまでに結婚したい？」「い、いつまでに、結婚、したい。とか思ったことは、ないな」

鑑別書を取引先へ届けに行く。自転車をごぐたびに、ひよひよ、かすれた口笛の音。

この街では夕方になると、皆がスーツケースをずるずると曳きながら歩いている。地図で見ると近くに小学校があるけれど、小学生なんて見かけたことがない。北口からバスロータリーへ延びる黄色いプロックの上を、白い杖を持った男が歩いてくる。その背中に張り付くように、女の姿がある。後ろから支えているんだらうか、と思ったら、女も白い杖を持っていた。二人、電車ごっこのように連なって、おぼつかない足どりで歩いてゆく。

また日曜。平沢展を見に行った。よかった。再来週は晩年の絵を展示するといふ。

ゆきちちゃんに、一緒に見に行きませんかと持ちかけて、つれなく断られる。わかったー、と返信を打ったら、十五分くらいしてから、ごめんによ。と一言返ってきて、よって何だよ、とちよっと思っただけど、面倒なのでそのままにする。

結局、夏の旅行以来一度も会ってくれず、私が一体何をしたの、と考えてみれば、色々したようで、しかしその大半は不可抗力のことなので許してくれないだらうか。いや、無理なんだね。そもその始まりは、いつだったか、私がゆきちちゃん

をぎよつとさせる変な言葉づかいで喋り出したのがいけなかったのだ。机に突っ伏していると、のうん、のうん、と机が揺れている。壁も揺れている。地震かと思ったら、自分の心臓だった。上体を起こしたら自分だけが規則的に揺れていた。風邪を引いた喉と耳の奥、綿がつまっているみたいで息しづらい。

部屋を掃除すると、野宿に関するミニコミ誌がなぜか五冊も出てくる。第一号から第五号まで。去年あたり、いざれ自分が野宿をする身になったらどうしようという漠然とした不安から買った、ような気がする。読み返すとけっこう実践的な内容。公園で職務質問を受けると面倒であるとか、駅のトイレで寝るのも一案とか。なんか辛いな。野宿は。

〈了〉

nanakikae

本好きがこうじて手製本やブックカバーまで自作してしまふ「文学少女」。ブログ日記「日々是読書 (http://gosui.exblog.jp/)」が人気を博し、「彷徨月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の館』(佐々木丸美)、『自負と偏見』(オースティン)。



街中の古書店からの帰り道を、ふと、歩いて帰ろうかと思いついた日だった。知らない道を曲がると、ほん、という看板が見えた。幾分ふるびて、赤い文字の輪郭がこぼれている。近づくと、そこはクリーニング屋であった。ただ、よく見ると、クリーニング屋の中に、奥へ伸びる通路がある。暗がりに見えるのは本棚のようだった。引き戸をあけると、店主とおぼしき男が顔をあげた。

あのう、本が。

言いさすと、五百円、と言う。よくわからぬまま硬貨を差し出すと、白い紙束を渡される。五枚綴り。しぶい鍵穴のついた、素っ気ない紙束である。男は何も言わない。そのまま奥へ行く。しどけなく座る女の人が手を差し出すので、紙束を手渡した。乱暴に千切った紙の端を握り込んで、しっし、と言う。中は、存外に広い。

うっそうと立ち並ぶ本棚の側面には、経年に茶けた半紙が貼り付けられている。何かと思つて近づくと、「あ、から始まるかも知れない本」とある。へんなの。

ひととおりの本を見終えると、本棚の影に小机が置かれているのに気づいた。あまににおいをひかれて見つめると、その人はつややかにひかる林檎に刃を入れた。皮を剥き、縦に割る。下にひいたわら半紙に、果汁がはたはたと滲む。

思わずは、と息をこぼすと、その人はまぶしげに私を振り仰いだ。りんとう鳴るのは銀色の刃。身体のはんぶんを影に染めた輪郭が淡い。

そうして、その人は私に、この場所の使い方をそつてなく教えてくれたのだった。紙束は入場券で、五回分。本を汚さない限り飲食は可能だが、喫煙はよろしくないこと。貸出方法は懐かしいカード式で、ポットのお湯はなくなつたら汲むこと、等々。私はその日、紅茶を三杯かけて一冊の本をはんぶん読んだ。

\* \* \*

水を吸うように本を読むのだね。

と、頬杖をついたその人は言い、私はゆつくりと顔をすべらす。何を言うの、と。やつと本を閉じた。

黙っていると、ごつごつとした八朔の実を取り出して、美味しそうだろう！ と言う。はたりと床に風呂敷が落ちる。その人は自分のものであるのに、暗がりにも広がるめざましい牡丹のいろには一瞥すらくられてやらない。可哀そうに、と目を伏せた。

徐に厚い皮を剥く手は、私の家事を知らぬ手が、柑橘の皮を剥くには熟れていることを、識らない。

その人は、私に果物を食べさせるのが殊のほか気に入っている。初めて会った時からずうつと、果物を与えられなかったことがない。筋を取り、中の袋を丁寧によぶつた指さきが、ついと伸びる。最早慣れたもので、私は黙って口をあけた。すべりこんでくる指に歯を立てる欲が一瞬兆し、すぐにやめましょう、と思う。おおぶりの八朔の実が私の口のなかでゆつくりと弾け、みずみずしい甘さが喉を浸した。生きていて、と心が啼く。無言で八朔を食べ分かつ。甘くべたつた指をガーゼでぬぐってやり、紅茶を淹れた。

その日、紅茶を四杯と八朔はんぶん、豆本を三冊読んだ。無造作に背の高い本に挟まれてへたり、古びた着物地をまとつた本はまるで、遠い先のその人と私のようであった。 ㊦

# けものみち計画の 文豪擬獣化宣言



⑦吉屋信子 || オランウータン  
内澤旬子 ● Uchizawa Junko



67年生。世界各国を旅し、本作りの場から、図書館・屋敷場・トイレまで取材。緻密な情報と果敢な切り口で、繊細なイラストと、批評性と好奇心の絶妙に混在した文章を著す。著書に『センセイの書齋』や『世界屠畜紀行』など。 http://kenononmi.exblog/

終戦直後に文芸誌『人間』の編集長を務めた木村徳三は、初めて吉屋信子に会ったときの印象をこう書いている。

「会つてみると、評判どおりの才気溢れる能弁家であった。甲高い声がよくひびく。その上、才女・名スピーカーの他に実はもう一つあった評判——漫談家大江司郎に似た不美人だという——のほうはそれほどではなかった。聡眸がよく光る、立居振舞いの生き生きとした女社長を思わす風貌だった」

大江司郎に似ているかはともかく、吉屋信子の写真を見て、梶井基次郎の顔を見たのと同じぐらいの衝撃を受けたヒトは多いだろう。吉屋の小説を彩つた中原淳一が描く少女とは、一万光年も離れた女性がそこにはいた。

女流作家の集合写真でも、吉屋信子のところだけが3Dのごとく浮き上がって見える。当時としては珍しく洋装が多かったこともあるだろうが、和装であっても吉屋の顔だけは一発で判るのだ。そんな不幸な出会い(？)のせいで、しばらく前に吉屋信子の少女小説が次々に復刊されたときも、手に取らずにすくってしまった。

しかし、市川慎子『おんな作家読本「明治生まれ篇」』(ポプラ社)で紹介された吉屋信子像があまりにも魅力的だったので、『自伝的女流文壇史』(中公文庫)を読んでも、コレがめつぱう面白い。たとえば、田村俊子の章。十八年ぶりにアメリカから帰国した田村は、後輩の吉屋信子に菊池寛から金を借りてくるよう頼む。菊池にきっぱりと断られ、吉屋はその返事を田村に告げに行く。

『そう』平然とつぶやくように言つたまま、彼女は鮪のトロをさもおいしげに口に運んでいた……。つづいても一つ平らげると生薑の一片をつまみ、次に赤貝に箸をと、止むところを知らぬありさまであった。(聡 俊子女史の箸の動くのを、無言で見詰めているうちに、うすら寒い佇しさに痺々させられて気が沈んでしまう。そこをこに挨拶してアパートを出たわたくしはその前の輔道に真屋の陽の光を浴びた時、さながら暗い妖しい洞窟から逃れて出て来たような感じさえした)

また、林芙美子の章では、「誰よりもさきにかけてたわれ一人の功名に他の追隨を断固として許さぬ逞しさ」を持つ林が、つねに吉屋に対してライバル心を隠さない様子を辟易した調子で記している。この文中に、林が死ぬ直前に吉屋と出席した座談会のことが出ている。その「女流作家座談会」で吉屋は、他の三人(林芙美子、佐多稲子、平林たい子)が家庭と創作の軋轢を、独身の(といつても、門馬千代という最愛の同居人がいたのだが)吉屋に自慢げに語るのをあっさり受け流している。

「連載」一ッ所  
福永信

# 二ッ所



Illustrated by 法貴信也

ずつとバスに乗ったままで。一番うしろの座席にひとりきり。鼻の頭にちよつと汗をかいている。ようするにテカッている。ふだんならすぐにさつとふきとるところだ。それが今はそのままになっている。幸いほかに乗客はいない。だれも見てなかった。もしだれかいたとしても鼻の頭に汗をかいていることに気づくなんてめつたにあるもんじやないが。近くでじつと見てたなら気づくだろうけれどももちろんそんなふうにはじつと見られていたらAにしたって気づくところだ。何じつと見てんですか。腰に手をあてツカツカ歩み出て聞くかもしれない。一度そんなふうにつめよつたことがあったのだ。男の子は顔を赤くしてうつむくしかなかった。かわいそうに。じつは今もその男の子がじつと見てるのだけれどAは気づいてなかった。目をしてたから。むろん立ち上がりすることもなかった。以前走行中の車内をあちこち移動して運転手が立ち上がって怒ったことがある。その反省にしたがって走行中は座席で目をつぶってお行儀よくちゃんとすわっているというところだろうか。とんでもない！反省なんぞするはずがなかった。そういつたことでは一目置かれていたのだ。姉さんと呼んで慕う者すらいるほどだ。Aは結婚願望が強かった。子供は四人ほしかった。我が子のいうことはなんでも聞いてやるつもりだ。

結婚の願望はあっさり成就し第一子は母に似てわがままに育っている。つい先日走行中のバスの車内をあちこち移動して運転手が立ち上がって怒ったほどだ。髪は父のムースとかジェルとかをたっぷりつけて逆立てている。学校の先生に注意されてもやめなかった。わがままだからだ。けれども三か所の遊園地をはしごしたいというのにはさすがにできない相談だ。これはいつただれの入れ知恵かと思つた。はしごしたいだなんて小さな子のセリフじやない。母はそう思う。そして夫の顔を見る。夫の鼻の頭がテカッている。それがまぶしくて腕で目をおおう。ひとつにしばりなさいといつてこはんつぶをとろうとする。それはできないと我が子は手でさえぎるようになる。砂場であるでも手をあらわなからツメの中までまっくらだ。鼻に絆創膏を貼っている。しかしなんとということだろうか。日曜の正午すぎというのに三か所の遊園地すべてをはしごすることができたのだ。姉さんのために特別ゆつくりあの日まわつてくれるようにかけあつたのだと夏にハガキが一枚とどいた。タヌキの絵柄だ。差出人

はBの名前。すると私はだれなの。Bはそこで目をさました。鼻の頭にちよつと汗をかいている。Bはそれをさつとふきとると立ち上がった。バスが終点に着いたのだ。

かつこいいとCは自分のことを思つている。人に聞いたことはない。いわれたこともなかった。しかしつい最近そのように確信しそれは本人にもどうしようもなかった。必然的に鏡の前にいる時間がながくなる。母親の目を気にしすぎて父親に見つかってしまったのは先週のことだ。口止めをおねがひしたけれどもはたしてあの父親のことそれがいつまでもつかかCは過去の経験から不安だった。そのための対策を至急練る必要があつたけれども今はそんな余裕はなかった。雨と風に目下頭を悩ませているからだ。かつこいいと自覚して以来傘を忘れたことがなかった。けれど風が強く吹いた日にはどうしようもなかった。何度か学校をやすんだがそれもいつともうわけにはいかなかった。むろん大敵は体育の授業だ。白いゴムのついたピツタリとした帽子をかぶらなくてはならないからである。その帽子をかぶることも抵抗があつたがそのためにかつこわくなるのは自分だけではなかつたからそれほどでもなかった。そのあとの時間がむしろ問題だった。だからこのところずつと次の時間が保健室ということになる。おなかがいたいとか貧血とか適宜症状を変えていたがうつかりほんとに入院させられそうになつたこともある。わざとケガして外科的処置をほどこしてもらうこともあつた。保健室から出て教室にもどるときじつくりと鏡に向かう。Cは鼻に絆創膏を貼つた自分を見てさらにかつこよくなつたと思つた。

さつきまでの雨のおかげで砂場は今ベストコンディションだ。また来たかと一人が声をかけた。また来たよとDがいつた。いつもならここでしつと追い払われるのが常であるが今日はちがつた。有名な大手ゼネコンによる一大事業がくりひろげられていたのである。そこで下つ端にも仕事が命ぜられたというわけだ。会話はそれだけでみんなあとはせつせと巨大ピラミッドにトンネルを貫通させる作業にもどつた。やがて運河を延長させるといふ話を持ち上がる。それならトンネルをもう一か所掘ろうじやないかという意見と対立する。小さな如雨露をかたむけるとかならず自分も一緒にかたむいた。だから片っぱの膝小僧が汚れている。だれかが水をかけたらしくべつのだれかがやめろつていつた。でもそれはすぐに笑い声に変わる。隕石が衝突することもたびたびあつた。五年生には文句はいえなかつた。おまえ行つてこいとDがさしむけられる。Dのサンダルをうめているやつがほりかえしてやらうと思つてやつがいる。それをあと

林は「吉屋さんはいつも聞き役なんだからね」と、不満そうだ。政治家、女優、歌舞伎俳優、落語家などを取り上げた『私見た人』でも、吉屋の眼はクールで、ときどき辛辣だ。それでいて、ちよつとしたエピソードによってその人の良さを描き出している。

吉屋は、デビューから約五十年間、文壇の第一線で書き続けていたが、少し身を引いたところでは、静かにその住人たちを観察していた。日本人離れした濃い顔の真ん中で、いたずらっぽく輝いている眼。吉屋信子は、「文壇」という森に住むオランウータンだったのではないかと。

参考文献 『吉屋信子全集』全十二巻 朝日新聞社  
『生誕二〇年 吉屋信子展』 神奈川近代文学館  
『RAWA E道の手帖 吉屋信子』 河出書房新社



# 若武者

斎藤緑雨

天に轟き地に轟く喧嘩の聲、鐘鼓の聲、腰さき風西より吹いて修羅の呵責を眼前に戦ひ方にさし、酬はなり我等が生死存亡は今日を定めと鎧ふたる蘆屋三郎知行は君側近く侍したてまつり城を護りて居たりける

城は三方山を負ひ古松老杉雲を摩でおのづからなる崩高し飛瀾奔流雪を吐き自からなる濠深し險阻をたのみ一郭いかなる鬼神の寄せ來るときも此城のみは落しと見ゆ

檜に登りて手を翳せば嘗て姫君轉り參らせて衝につみたる春の野も嘗て家僕うち從へて雨に釣たる秋の江も目に滿つる限り踏荒らされて屍の山血汐の海不祥不吉の叢と見るく變る浮世なり

きらめく劍の雷光の消ゆる早きは命なり渦まく銃の火煙の登ぼる薄きは縁しなり敵も味方も入亂れ鎧をけづる其勢ひ凄し氣強し勇し猛し旗幟へり駒嘶く

開いては鶴翼閉ちては魚鱗八門六花は兵の法なり逃ぐれば追はれ追へば突かれ敵は退き味方は進む弓矢八幡大菩薩勝算我れに難有の甲斐ある士卒が働きかな檜を降りて其由を君に告ぐれば君も亦兜を脱いで立玉ひほくそづきてぞ在しける

兵を馳せて容子いかにと尋ぬるに正しく味方は勝利を得て一里が程は敵を卸け最早君家は安らかなりと二度が二度迄復命せり左もと知行點頭きて勇氣日ごろにますら雄の心は潔し解け易く君が賜はる盃をうけ頂いて恭々數武運長久をことほぎぬ

時にひとりの兵士來りて蘆屋殿は在するか知行ぬしは在はするかと嘯々呼ぶに驚きて何ぞと問へばあら淺まし我軍勝に乗じて敵を河原に追詰めしが敵もさる者謀計富めり忽ち後ろに伏勢起りて右左より挟み撃ち血戰數刻に及びたり死力を盡して防げども平地の懸けに馴れざれば我れは新手になやまさ

れ名あるは多く討死して河原より先づ戦は破れたりと朱に染みたる太刀を杖、つく息せわしく言すて、さらばと又も走り行く

さては我軍破れしか口惜しや今の喜び夢一時と化してげりと拳を握りて知行は昔する方を突立睨み駈も出づべき體なりしがやがて君前に跪づき味方軍機を誤まりて長追ひしたるが咎となり大いに敗北したりと聞くこれより知行馳参りて奇正の何れも早無益唯揉揉んで逐散らさん許し召せよと言ふ間にも響く聲は敵兵の我城近く進めるなるかと延び上りては無念の齒を噛む

君は目をつぶりて一言の答へも無し其間も味方敗北と呼來る注進櫓の齒をひくに引れぬ危急の戦ひ知行心沸き返り御免と立つを君はおし留め勝鬨祝ふ盃が末期の水と變り行く世の喜ひは哀みと豫て知らぬにあらざれども今と成ては詮無きことなり汝が心猛くとも二つの腕もつのみならずや萬に餘れる敵兵を何とかすべしと聲も曇りて鎧の袖に一滴の涙も家のためなるべし

御心弱き仰かな三郎知行馳向ふは彼れ烏合の野武士等がなまくら刀に用あるならず目指すは敵の主將が首を討て取らんと思ふのみ他はおのづから潰ゆべしと勢ひ込だる魂ひは朝日に匂ふ花の色あか糸の腹巻かさあげて忠と見ゆるも、三寸

然らば行けと許されてハッと勇んで立出づる廊下の邊りに低く呼ぶを誰かと思ればかねてより二世を契れる館の侍女衣笠といふ者なりけり騒寄て知行が袂をひかへおんみは死ぬる心かと顔差覗きて目にうらむ物數言はぬ李花の露啜含めば粧ほひの淡きもいとあはれなり

死出の山路も手を執りて俱に越えんとちかひたる昨日は今日の仇嵐逢瀬の關を吹こえて彼の夜はうつ、夢まぼろし覺めて果敢なき、ぬくも忍べばつらきものなるに死に、行く身が一言の訣別も我れに告げ玉はぬはいか程強き武士ぞ寐くたれ髪は亂れたるこの世の縁はかくもあれ未來の宿を聞してと名も衣笠の纏り着き我れと啜びてさめ、と泣く

裳しためらふ知行が流石これには腸を太刀もなまらんまなかに染てくやしき衣笠がなさけに心牽かれて渠が袂に雪の痕これを門出の形見草いつ迄永き色香かは、不敏と肩に手をかけしが忽ち聞ゆる喚びの聲知行耳を飲て、這はせざるなりこ、離せ敵兵既に近づきぬと心を鬼に振拂へば轉びかゝりて衣笠はマ一度顔をと再纏る

我れもいさ、か覺えありせめては俱に召連れてと心定めて衣笠がたのむを知行叱りのけ諍きが女のつねなりとて扱も未練も程こそあれ戦はわれ等が敵れならず一國一城の命運は今日

一日に決すべしそなたも覺えある者ならば跡に残りて君が先

途を見届くるが臣の分なり其處のけ邪魔と突放し遅れじものと願けり出づ

明日は眞如と我は見ん影今清き月毛の駒君が恩賜の逸物に知行はうち跨がり備強なるをすぐり、隨ふ者僅に十餘名いざと手綱は取ながら君に別れ妹に別れて功を萬一期する心の裡若しや限りと願みて三たび館を伏し拜む松も嵐に折る、とか項羽が昔し難不逆

路を迂回して敵の背後に出で名乗りも揚げず知行は眞先に太刀振かざし陣營近く討入つたり不意に驚く敵將は鞍壺敲いて兵を呼び敗れて北げし渠等が内にも武門の辱を知る者ありけん名を、しむ誠の武士の返し來れり撃ておの、手柄をせよと聲を絞つて勦ませば聞くに得たりと立向ふ敵は千百味方はひとり望ひはあれなる馬印し主將が首と知行は前に現れ後に隠れ懸ねけ懸入り懸廻る

あと邊を見れば隨へたる十餘名の士は皆撃たれて残るは知行我れのみなり待てよ九原路遠し我れも一度は行くべきを何とて急ぐあの世の空星暗し雲昏し硝煙彈雨舞ひ塞ぐこ、も思へば三惡道鬼殘月に哭くのちの目を誰れか來りて吊らはん唯この塚に芒の穂水く紀念を留むべし

城には君の待玉はんと知行再び勇を鼓し縱横無盡切まくりて遁る敵將追ひ近づき今や間ひは六七步早一突と意氣込む折しも飛來る彈の狙ひはそれ馬の前脚蹴くれば馬はこらへず躍りあがりて株に躓き斃れたる其間に目指す敵將は手綱つよめて逃れ行く

残念至極と知行は落つより早く起上り右より蒐るを切て捨て左より突くを拂ひのけきたなし返せ勝負せよと猶ほも追行く横合より我れを代て見參と打込む刃の下をぐりりて好き敵なれやと知行は呼吸を計つて無手と組む龍は嘯き虎は吼ゆ

彼方にほぐれ此方にほぐれ暫らく揉合ひ居たりしが知行が力や勝りけん敵を膝下におし伏せて首擡すてんと太刀取直し咄嗟と見ゆるも疾し遅し我城の方に當りてドツとあげたる聲諸共黒煙天に漲りて怒より紅き焰を吐く

君の御安否いかならんあの火、花爛れて風に飄へりあの灰、鳴くるひて波に起つ首尾克く落延び玉ひしか若くは生害し玉ひしか何れにも君家は倒る這は叶はじと敵突放し算を亂して横はれる城の上を踏越え蹴越え足そらさまに宙を駈けりて近寄るまゝに見上ぐれば櫓も半は燒落ちて、凄し震爆の聲山壑裂く

見れば敵兵ひし、と推寄せて十重廿重城を取かこみ蟻の入

るべき隙も無し深を渡り山を越えて裏に出づればこゝも敵な  
り髪逆立ち敵裂け館を睨んで知行は天運已に盡たるかと熱涙  
千行小手に凝ぎ力忽ちぬけて地にすくみ初めて知りぬ身は  
韓紅敵は凱歌の聲高し

所詮くやむも是迄なり必定君には御生害と知行は復た立上  
り我れも最期を潔くして君が三途のおん供と前なる山に攀  
ち登り樹立深き處に坐を組み物具手早く脱いで捨て腹割さ  
ばかんと小さ刀にハヤ手を懸くる其の時聲あり、なつかしや  
三郎どの

主はと願れば衣笠なりこれも手疵を數多負ひて長刀を杖によ  
ろぼひ来る、知行はうち驚き能うこそ和女は切ぬけたれ君に  
は如何遊ばされしとせわしく問へば衣笠は慥と伏轉びて泣顔  
れおんみの歸り遅きゆゑ君には太く案じ玉ひ股脈とたのむ三  
郎も討死したりと覺ゆるぞ到底も命運盡たるからは雙手を束  
ねて敵兵におめく首を取られんより死すべき時に死するを  
知て死を清くせんと城に火を掛け自ら刃に伏し玉ひと語りな  
がらもすゝりあく

シテ残りたる面々はと知行も亦目を拭へば衣笠は面を擧げ城  
内の士多くは敵に敵を通じ君の死に殉ふ者僅三名われは焔の  
下をくぐりて君の首級を土深く埋めそれより死出のおん供と  
既に刃を取直したれど言かけて膝摺寄せ未練とさげすみ玉  
はんが萬、おんみ生存りて逢ふこともやと城をぬけ辛く血路  
をさり開いてさまよひ出たれど影も無しさらばと我れも念ひ  
を断ち最期の場所は此の山と漸うたどり参りたりと言ふあと  
先も只涙

一々うなづく知行は頼て衣笠にうち向ひそれ聞く上は一時も  
早く君のおん跡逐ひ参らせん君龍涙き知行も君いまさねばこ  
の世に用無し和女と囁れて三歳越夢に思ひを忍びしも今を限  
りと覺め果たり和女も豫て覺期とあればいでく俱にと促せ  
ば衣笠も居直りて淺きを縁しとあきらむれば我れもめでたき  
命なりと西に向ひて掌を合す

南無と流石の知行も名残をいたむ經一口弱る心を勵して打て  
ば打散る花衣笠の色は嵐に消えて行く屍に我れも伏重りて二  
世の路連れ腹一文字衣笠は歳廿一知行は廿六調體をこゝの箱  
に封じぬ、時に紅葉の二つ三つ飛ぶや斜めに夕日照添む葉裏  
さやかに濃く淡く

出典、『斎藤緑雨全集 卷六』（筑摩書屋）

## 「解説」 青眼の人 円城塔

「接するに筆は一本也、筆は二本也。衆寡敵せずと知るべし」とかとか、警句によって今に知られる斎藤緑雨は、才と無遠慮、兎にも角にもやりすぎにより、それは屢々舌禍を起こした。貧困の中、三十七歳にて身罷る。

小説を書いた。まず儲からなかつたらう、とは「かくれんぼ」などを見るに歴然とする。句読点のない文章がずらりと切れずどこまでも続く。わざとか、というのに、わざとでなければこんなものは書けないだろ。嫌がらせか、となるとよくわからない。

「何かなるべくはすこいものを」との依頼で書いたらしい。「かくれんぼ」の如き途方もないものを書いたと、本人も満更でない様子であった、救えない。こんな男にそんな依頼をする方が悪い。更には、途方もないもの、は当人としては形式ではなく、内容を指すらしいのだからお手上げだ。

「かくれんぼ」は少し長いので、「若武者」などを。まだ日本語で小説をどう書くべきか、誰も尻の座らなかつた頃の話である。おおよそ、江戸趣味と見られたらしいが、今となっては過剰な実験小説として通るだろ。斎藤緑雨に、正面切って下手糞だと向かえる方は向かうと良い。当方としては与り知らない。

晩年、警句を発表することが多くなる。様々面倒になつたせいかどうなのか。

多く小説を書き続けられれば小説家足り得た男である、と幸田露伴などは惜しんでみせる。小品を続けたために、大きいものが出ずってしまったのが残念だという。そうは言っても、三十七で亡くなったのであり、当人もそこで果てるとは予定がなかつたのではないか。もっとも、覚悟は充分にあつた。死期を悟るや、死亡広告を用意している。

「僕本月本日をも以て目度度死致候間此段廣告仕候也」喰えぬと見るか素と見るか、単に、正しく物の見えた人ではないかと思う。



斎藤緑雨 ● Saton Rokun  
一八六七—一九〇四。仮名垣魯文に師事し、「油地獄」「かくれんぼ」などを発表。パロディ精神あふれる辛辣な評論、アフォリズムの書き手としても知られる。また、樋口一葉の真像を理解し、親交も一葉の死後には全集の校訂を引き受けた。



円城塔 ● Encho Toh  
72年生。空から人が降ってくる町で、それをパットで打ち返すレスキュー隊を描く「オブ・ザ・ベイスボール」でデビュー。その後、超前期SFの『Revenge Engine』を刊行、純文学・SF界の注目を集める。理系のバックボーン、人食った設定で、ロジカルかつ生真面目に語る筆致が魅力。

### 講談社◆話題の新刊

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

## 各紙誌絶賛の第140回 芥川賞受賞作!



# ポトスライムの舟

津村記久子 雇用不安定時代の新文学!

定価1,365円(税込) ISBN978-4-06-215287-7

たちまち  
4刷!



少年は、おぼけ団地に向かう緑色のバスに乗っている。

灰色のダウンジャケットを着た運転手が操作する電気駆動のバスは冬の午後の中を静かに移動していく。乗客は彼と杖をついた老夫婦が一組。お揃いのカーディガンを着て中ほどに並んで座っている。老人は上品な兎毛の黒い帽子をかぶり、老人は肩からフリンジのついたスツールをかけている。ふたりはさきほどからずっと、老人が膝の上にのせた籠を見ながらなにか囁き合っている。蹴だらけで表情が読みとれない。動物の糞に似た異臭がする。ときおり、籠の中から鳴き声が聞こえるのだが、それがどういった動物なのかはわからない。少女が少年のほうにちらりと目を向ける。少年は顔を隠すように一番後ろの席の端に身体を寄せると、結露でさえぎられた窓の視界をひとさし指でこすり、禿げた茶色いフェルトのシートで濡れた指をぬぐいながら外を見る。曲がりくねった道。それに沿って続く、ところどころ破られた鉄のフェンス。等間隔に植えられた桜はまだ咲いていない。ペンキのはげた青いジャケットは、経年劣化してところどころ錆びたり凹んだりしていて、そこには「理髪店ビエール」「竹寿司」「YODO文具店」「ひまわり亭」店の名前が書かれている。三街区のバス停が近くなる。少年はボタンを押す。停車してドアが開き、ステップを降りる。少年はそのとき老人の持つ籠の中身と眼が合う。毛だらけの幼虫に見えた。老夫婦は笑いながら籠の中で動かないそれを、痙攣するように鉄の火箸で突く。四肢のない小さな猿が鳴いた。

バス停から団地を見上げる。南向き4LDK。6階建ての鉄骨。屋上には着陸したばかりの宇宙船のような三本足の給水塔が見える。「3ーあ」と書かれた団地のひび割れた壁を確認して少年は階段を登る。エレベーターはない。登ると正面に配電盤、左右に扉がある。5階までのぼり、左の部屋の前に立つ。鉄の分厚い扉は水色に塗られていて、真ん中に魚眼レンズと郵便穴がっている。ドアノブはステンレスで、鍵穴だけが茶色く

すこし錆びている。少年は黒いコートのポケットから右手を出し、ドアノブをひねる。カギはかかっているなかった。扉は軋みながら開く。

玄関は真つ暗だ。靴箱の上に、写真立てがあるが、写真は入っていない。少年は靴を脱がずに進む。廊下のドアをあけて、薄暗い部屋を進む。明かりはリビングのカーテンの隙間から差し込む少しの光。左右に部屋がある。右は子供部屋で左は両親の寝室。ベージュの扉の表面はなにかで殴られた無数の穴。白いクロスの上には、皮のようにべろりととはがれて垂れ下がっている。中心は、なにかをなすりつけたような汚れ。少年は暗がりのなかでも、それが血の汚れだということに気がつく。廊下の途中にあるカウンスターキッチンも抜けて、奥のリビングの真ん中に立つてみる。フロアリングは剝がされ、剥き出しのコンクリートの上には、丸い円と四角い形。見たこともない文字がびっしりと書き込まれている。自分の息づかいが聞こえる。少年はカーテンを開けようとして、やめる。リビングの奥には鉄の螺旋階段がある。団地としては珍しい二層型。少年は上を見る。たれさがったロープはまだそのままになっている。螺旋階段を上がると、壁はなにか鋭いものでひっかいたような傷が無数に付いている。それは上に行くにつれて、どんどん多くなる。登り切った北と南にひとつずつ部屋がある。少年は北側の部屋の前に立ち止まる。木目調の引き戸は傷で埋め尽くされていてポロポロだ。ゆっくりと開ける。中は埃を被ったベッドと机が残されている。机の上にはノートやいろいろな書類が積み重ねられている。少年は首をかしげながら近づき、机の上に座ってそれを読む。ひとつめを見るとそれは新聞の切り抜きと作文だ。胸に「死」という文字がおどろおどろしく胸にしみこむ。ふたつめはマンガの絵がかいてある。女の子の絵だ。他のファイルを見る。3は写真と燃えた紙、4は地球儀と怪しげな写真、へんなチラシみたいなもの。父親を思い出す。5はネットの画面だ。みたことがある。6で最後らしい。文字がいつかあってわからない。ただ、少年にはわかる。これは自分に関するものだ。震える。コートのポケット

トを探り、少年は銀色の鉄釘を取りだすと床をひたつきながら、興奮を抑えきれず身体を前後に激しくゆする。そのとき、玄関で物音が聞こえてくる。少年は手を止める。

ひとりの子どもがファイルを手にして、扉を開く。音を立てないように、ひっそりと中に入り、誰もいないことを確かめる。廊下を抜けリビングの螺旋階段をのぼって、いつもの部屋に入る。誰もいない。ここはひみつ基地の別室として発見された書庫だ。いろいろな事件のファイルがこの部屋に集められている。おぼけ団地ではたまに、鍵のかかっている部屋が発見される。それを見つげると、見つけた者の基地になるのがこのルール。この基地を見つけたのは春休みにはいつてすぐのころだけれど、気持ちが悪いくのでみんなと会議して書庫にすることにした。団地の粗大ゴミから拾ってきた、家で見つかったら怒られるような本がいっぱい隠してある。子どもは手にしたファイルを机の上に置く。春休みに入ってから仲間たちで気持ち悪い事件を集めている。ポケットの中の携帯が震える。子どもはびくっとして携帯を見る。お姉ちゃんからのメールだった。すぐに帰ろうとするが、床になにか落ちていたのに気づいてそれを手にする。釘と錠剤の入ったシート。子どもはしんと静まりかえった部屋を見回すと、急に誰かの視線を感じる。子どもはベッドのほうを見つめ、そこから充分に距離を取り、ゆっくりと屈んで、ベッドの下を見る。

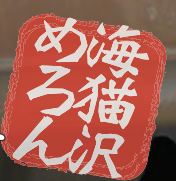
誰もない。

釘と錠剤をポケットに入れて、螺旋階段を駆け下りるが、思わず足がもつれて転げ落ちる。地面に頭を叩き付けられたが、急に起きあがり廊下を走りぬけて玄関にたどりつくが、ポケットの軽さに気づいて慌てる。携帯がない。振り返ると廊下の向こうの螺旋階段の下に落ちていた。子どもはゆっくりに廊下を歩き、近づいて、すばやくそれを取る。子どもが悲鳴をあげる。誰かに手を掴まれている。薄暗くて見えない。いや、視界になにかが突き刺さっている。身体が浮かぶ。中身のつまった野菜を叩き潰すような鈍い音が聞こえて、意識は消える。

Uminekozawa Meron  
75年生まれ。様々な職業を経て作家に。住所不定を脱し、定住者に。各所を転々としながら作品を発表。著書に『左巻キ式ラストリゾート』（絶版）『舞-HiME』『嫌オタク流』『零式』など。



# シリーズ・少年Aの系譜





フリーペーパーなんだから、  
街へ出てゲットしろ、  
もしくは郵送で送ってもらえ、  
俺の文章はデータじゃねえよ。

(※編集部注：モブ・ノリオ氏の「Yumi」より引用)

…という著者の意向により、『絶対兵役拒否宣言』は紙版でのみ掲載しております。

「感動を呼び起こす自由への賛歌」  
マリオバルガス・ハリソン著

## マラーノの武勲

本邦初訳  
マルコス・キヌ・デル・カストロ著  
1767〜1777年、南米大陸におけるあまりにも  
苦烈なカトリック教会の異端審問と、命を賭して  
それに抗したあるユダヤ教徒の生涯を、壮大無  
匹のスケールで描き出す。アルシオン・現代文学  
の巨人マリオバルガス・ハリソンの大傑作！ \*5040円

エリアーデ自身を語る

## 迷宮の試煉

ミルチャ・エリアーデ

20世紀の宗教学と文学において最大の影響を及ぼした現代の碩  
学ミルチャ・エリアーデ、そのあらゆる著作の精華を凝縮した  
名作。時々の風潮なる「異端」の「異端」の「異端」

### 白鳥のシリアルナイフ

長篇小説 白水千恵子 著

『長篇小説』 白水千恵子 著

『中・短篇集』 白水千恵子 著

『小説集』 白水千恵子 著

『新耶新天』 白水千恵子 著

『クイア』 白水千恵子 著

『酷児評論集』 白水千恵子 著

『母の国』 白水千恵子 著

『クイア』 白水千恵子 著

『酷児評論集』 白水千恵子 著

『母の国』 白水千恵子 著

『クイア』 白水千恵子 著

『酷児評論集』 白水千恵子 著

『母の国』 白水千恵子 著

『クイア』 白水千恵子 著

『酷児評論集』 白水千恵子 著

『母の国』 白水千恵子 著

作品社 東京都千代田区数寄川2-7-4/信託込  
TEL03(3262)9763 FAX03(3262)9767

# 旧作異聞 17



高藤美奈子 ● Satō Minako  
56年生、文芸評論家。94年、『結婚小説』で評論活動をはじめ、他の著書に『たまには、時事ネタ』『それってどうなの主義』など。



『智恵子抄』（新潮文庫）

高村光太郎の代表作といえ、ひとつは十和田湖畔に建つ裸婦像（乙女の像）だろうけれど、もうひとつは「智恵子抄」である。

国語教科書に載っていた詩の一節に聞き覚えのある人も多いだろう。〈あれが、阿多羅山、／あの光るのが阿武隈川（壺下の二八）、〈智恵子は東京に空が無い、／ほんの空が見たい、いふ〉（あどけない話）／そんなにもあなたはレモンを待つてゐた／かなしく白くあかるい死の床で／わたしの手からこつた一つのレモンを／あなたのきれいな歯がかりり／噛んだ（レモン哀歌）。この詩集の存在によって、安達太良山は全国的に有名になり、高村光太郎と智恵子夫妻は純愛を生涯貫いたカップルとして知られるようになった。

『智恵子抄』は智恵子の死の三年後、一九四一年に出版された詩集である。現在広く流通しているのは光太郎の没後に改訂された新潮文庫版で、ここには四七編の詩、六首の短歌、ほかに「智恵子の半生」など三編の随筆が収められている。巻末には草野心平による「悲しみは光と化す」と題された解題と「覚え書」がついていて、この「覚え書」の中にある〈これは稀有な愛の詩集である〉の一文が、本書のイメージを決定したのではないかとも思われる。

だが、この本は本当に「愛の詩集」なのか。冒頭の詩で、私たちはまず意表を突かれる。

へいやなんです／あなたのいつてしまふのが――、／なぜさうたやすく／さあ何とひませう――まあ言はば／その身を売る気になれるんです／あなたはその身を売るんです／一人の世界から／万人の世界へ／そして男に負けて／無意味に負けて／ああ何とこい醜悪事ぞ（八）に

智恵子と知り合つて間もない頃（明治四五年）に書かれた詩である。「身を売る」という言葉で結婚制度の本質を突いているようにも見えるけれども、要は「自分以外の男と結婚するのはイヤだ」とゴネているだけにも見える。こういうレトリックで彼は智恵子を口説いたのだろうか。この詩が苦笑と同時にやりきれなさを誘うのは、第一には制度一般のせいにして彼女の結婚に異議を申し立てているからであり、第二には、しかし光太郎自身が結局はこの詩にいう「男」の役割を演じることになつて

しまったからである。

この詩を起点に『智恵子抄』は二人の軌跡を年代順にたどっていく。「樹下の二人」（大正二年）や「あどけない話」（昭和三年）は、貧しいながらも智恵子が一応健康だった頃の詩だ。ところが昭和一〇年代に入ると（狂った智恵子は口をきかない）（風の中の智恵子）昭和一〇年）状態の中で会話が成立しなくなった妻をスケッチしたような詩が増え、妻の最期を描いた「レモン哀歌」の後はひたすら亡き妻を偲ぶ詩ばかりになる。

たしかにそれは「稀有な愛の詩集」だろう。だが「光太郎にとっての一方的な愛の詩集」であるという事実は曲げようもない。智恵子の前半生を知る人にとって忤然たる思いは余計つもの。高村、いや長沼智恵子は「愛の詩集」の中に閉じ込められて満足するような女ではない（とどうしても思いたくなる）からだ。光太郎と結婚する前の智恵子は、女子の最高学府である日本女子大を出て、前途を嘱望される洋画家の卵だった。同窓の平塚らいてうとはテニス友達で、「青鞥」創刊号の表紙を描いたのも智恵子である。つまり彼女は当時の「新しい女」のひとつだった。しかし光太郎との結婚後は「芸術精進」家庭生活の板ばさみになるような月日（智恵子の半生）が続く、結局は才能を開花させることもなく、晩年には精神に失調をきたして、五二年の生涯を閉じた。あんな男と結婚したばかりに……とはまあ、だれもが思うところだろう。

そんなわけなので、高村光太郎はいわゆるフェミニズム批評の世界ではすこぶる評判が悪い。日本のフェミニズム批評は『智恵子抄』批判からはじまったといつてもいいほどで、妻を抑圧した男の「贖罪の文学」だと駒尺喜美はいい（魔女の論理）一九七七年、贖罪にすらなっていない、女に無限の献身を強いた凄絶な「殉教」ないしは「首狩り」の書だと黒澤亜里子はいききつて（女の首）一九八五年。

問題はしかし、そのような詩集がなぜいままお「稀有な愛の詩集」として流通しているかだろう。「男が書いて女が死ぬ物語」という点では、これもまた『不如帰』の系譜を継承しているといえるけれども、同時にふと思つたのは、『智恵子抄』ってケータイ小説に似てるかも、ということだった。純愛と不幸を丸めたような物語内容に加え、なにせ詩だから改行だらけだし、ケータイ小説同様「実話」を標榜しているし。そう、『智恵子抄』は実話だということになっている。だがここに、光太郎の願望や幻想はまじっていないだろうか。「レモン哀歌」など、美しすぎて、フィクションではないかと私なんかは疑いたくなる。

もし教科書に載っているのが「レモン哀歌」とかじゃなかったら、『智恵子抄』の教育的な価値はもう少し上がったかもしれない。へいやなんです／あなたのいつてしまふのが――と恋人に訴える冒頭の「一人」など、の男のころのままになるなんてと、恋人に訴える冒頭の「一人」など、ジワッと気持ち悪くなる点で、あるいは「いいか、男に騙されるなよ」「女を抑圧するなよ」と教えるテキストにピッタリ。これから人生を歩んでいく高校生は愛の欺瞞について学んだほうがいいのだよ。

## 扶桑社の文芸単行本

### 夏の水の半魚人

前田司郎 著  
最新小説  
■定価 1,680円(税込)

### あなのかなたに

湯浅学 著  
初音楽小説  
■定価 1,785円(税込)

### 角川春樹句会手帖

佐藤和歌子 著  
4.24 発売  
最強俳句入門

### 架空の料理 空想の食卓

リリー・フランキー 著  
4.14 発売  
澤口知之

■予価 1,890円(税込)

## 超世代文芸クオリティマガジン

# en-taxi

エンタクシー 25号  
A4変型判 定価980円(税込)

責任編集 福田和也 坪内祐三

3/28 発売  
リリー・フランキー

「詩集」プロレタリア文学再読  
主義者たちの闘争線

佐多稲子／中野重治／蔵原惟人  
葉山嘉樹／宮本顕治／宮本百合子 ほか

「特集」海千河千佳味ばなし  
坪内祐三・対談3連発

Part 1 リリー・フランキー  
「日本映画の熱量を浴びる」

Part 2 菊地成孔  
「格闘技―新たな旋律と冒険と」

Part 3 湯浅学  
「八〇年代、あの頃の音楽とトーク」

「小説」演出家 杉田成道 自伝小説  
「願わくは、鳩のごとくに  
六十過ぎの子育て記」

「小説」杉作 J 太郎／山下陽光

「連載」名跡問答  
立川談志×古今亭志ん生

「連載」エッセイ「二本線の五線譜」南博

桶谷秀昭／宮崎啓子／佐藤和歌子  
いしいしんじ／木村紅美／平松剛／小池昌代  
戌井昭人／谷崎由依／角川春樹&笹公人  
新元良一／片岡義男 ほか

# アモイで、考えてみた。

## 青木純一・倉数茂 往復書簡 ③

こんにちは。ご承知のとおり、冬休みのひと月は、生まれつきの娘と過ごしていました。おもしろいのは、網膜細胞ばかりか、脳の視覚処理システムもまだ未完成である新生児は、目をあけていてもあまり視線を動かさない。だがひと月ほどすると、目の前の物体の動きを追うようになります。しばらくすると、今度は人の顔を追いかける。ただし正面像だけです。顔の形状のみに反応するニューロンがあることは知られていますよね。その原初的な機能が作動しはじめて、今、彼女のなかで世界が「顔」として切り出された、というわけです。もちろんその世界＝顔は、のちに母親と呼ばれるなにかになるでしょう。これはだいたい先のことになるけれど、やがてはこの他者と視線を合わせる／外すという、相互参照的で模倣的なゲームを習得し、それが「私」という意識の萌芽になるのではないかと考えています。言葉の獲得とどちらが先になるのか。

むろん視線以外にも、つかむ、吸うといった身体的行為、空腹感と満腹感、行為に伴う感覚入力、つまり認知系と運動系による外界との相互作用のプロセスが進行しています。当然言語もそのひとつです。うちの子はまだ非弁別的な音声だけを発していますが（超ラプリーッ）、周囲の大人たちの話しかけによって、いつか言葉をしゃべることになる。その時点ではそれは意味よりも、世界の模倣、応答といった性格を帯びているのだと思うけど。けれど興味深いと思ったのは、こうした——あえて機械的と呼びたい——非意味的なプロセスによって、自己と世界が徐々に分離していくに似て、その世界はすでに「顔」のような人称性を帯びているということでも。これは結局、人は他者という装置を通してしか世界という情報を処理できないことを意味しているのではないかと。われわれは決して本当の意味で一人にはなれない。なぜなら無人の風景ですら、すでに顔と声によって満たされているから。

こう考えると、なぜ小説には必ず「登場人物」がいるのか、という当たり前すぎてアホくさい問いも意義深いものにも思えてきます。近代文学は、あらゆる情報を一度視点人物の知覚構造を通過して記述するというスタイルを確立したけれど、これは世界という情報処理の近代ヴァージョンでしょう。そこでは世界はつねに「私」にとっての世界として現れる。と同時に、視界に現れる他者も、潜在的な自己の世界を抱えている。その裏打ちをするのが、カントからハイデガーに至る主体観、すなわち世界に投げ出されつつ、その当の世界を構成・解釈する主体というヤツです。いわば一人称と三人称がお互いにややくしく入れ子になっているわけで、語りというのはこの入れ子構造そのもののことになる。

でも現在の小説を読んでいると、奇妙に言葉そのものが露呈している感じがあるよね。例えば青木淳悟の「TOKYO SMART DRIVER」(『新潮』2008年11月号)。視点がないわけではないが、特定の主体に定位させることはできず、微妙に遊離していく。福永信もそんな感じ。言葉を明確な誰かに帰属させられないかわりに、世界そのものが匿名的な知覚のようなものによって飽和している。彼らの作品は、ある意味では近年急速に拡大したパラダイムと親近性がある。具体的には脳科学、遺伝子生物学といった領域です。そこでは人文的な意味での言葉を介在させなくても、モノの振る舞いさえ捉えれば世界も人間も理解できると考えられている。というのは、それらの領域では、物質自体がすでに複雑な情報処理を行っていることが明らかになったからです。いわば、意識というメインフレームがなくても、世界(物質)というネットワークが並列的な分散処理を行っており、その事後的な効果として「人間」が存在する。たぶんそうした変化を、彼らは敏感に察知しているのだと思うのです。※「アモイで、考えてみた。」は「WB」サイトで連載が続きます。乞ご期待。

倉数さん、こんにちは。冬休み、短い間の娘さんとの蜜月はいかがでしたかな？ 赤ちゃんは母親似ですか、それとも父親似ですか。もし父親似だったら、この先(以下自粛)。

今回の倉数さんの問題意識は哲学的だね。僕も少し哲学的に考えて返信を書いてみます。倉数さんの「主体」の話で僕が思い出したのは、ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』以来の無人島物語の系譜、特にミシェル・トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』でした。この小説で追求されていたのは、もともと他者のいない世界から、いかにして他者が構成されてゆくか、という問題だったと思います。これはまさに近代の核心というべき問題じゃないかなあ。ところで倉数さんの指摘通り、近代小説というジャンルは人間(登場人物)の知覚・認識構造を通じて世界を表現するね。これはフーコーが『言葉と物』の中で語ったところの近代のエピステーメ(知の配置)、具体的には人文(人間)科学を産み出したほぼ十九世紀以降の西欧の知のあり方と連動していると思います。このエピステーメの内部では、「主体」は世界の中に投げ出されつつ、しかも世界を投企するという仕方です。超越論的かつ有機的に構成されます。でもこのような主体観からは、他者という問題はそれこそ「私」という主体の有機的構成の果てに現れる超越的な存在としてしか浮かび上がってこない。現象学や解釈学的存在論が間主観性の問題で躓くのはそのせいだし、この問題は形式化すれば、自意識のパラドックス——理性というシステムの無矛盾性はその内部からでは証明も反証もなしえない(ということ自体は証明可能かも)——にもつながると思う。

日本の文学で「自意識」の問題がクローズアップされたのは、小林秀雄や横光利一が活躍した時代だったよね。そして彼らの自意識の問題は、西欧の文学や思想の圧倒的な影響の下で価値観の形成をしてきた日本の知識人がもう一度日本やアジアについて考える際の困難と結びついていました。もちろん彼らの解決方法はよくなかった。日本の特殊歴史的な美や道徳を普遍化し、結果日本をアジアに対する奇怪な他者にしてしまった。でも、彼らが抱えた問題は、ポストモダンの圧倒的な影響を受けた僕らと決して無縁じゃないと思うんだ。ちなみに僕は、現在の文学状況はちょうど新感覚派が登場してきた頃と比較できると考えています。自意識の問題は今なお重要だと思う。ただ日本では、ポストモダンの「主体の死」という考えを内面や自意識の無化と「意識」して輸入してしまった嫌いがあるね。

ところで僕は最近、他者こそ実は経験的に構成される対象であり、またそうすることで自己の主体化も可能になるのではないかと考えています。笹野頼子の「自己内他者」や鹿島田真希の「分節と更新」の思考がそのヒントになったのだけど、現代文学は新たな内面形成、より正確には「外」と内面との新たな分節の形成に向かって動いているという予感を持ちます。そうだな、最近の作家で言えば、諏訪哲史の自意識の問題、川上未映子の意識と存在の関係への問いかけに顕著にその傾向が見える気がする。また福永信や青木淳悟、円城塔らの作品も、この運動と無縁ではないと考えます。僕自身は自分の文章の中で、この運動を時に「現実原則の再編成」といった言葉で呼んでいます。でも誤解しないでほしいのは、これはもう一度近代のエピステーメ、近代的な人間の形象に戻ろうとすることではなくて、むしろそのような人間の形態を組み直す運動だということです。これは晩年のフーコーの思想についてドゥルーズが「主体化」という言葉を使った時に注意したように、近代の「主体」に回帰する運動ではないのです。そして、この運動は日本ではきっともう一度アジアの問題にぶつかり、そこで真の試練と成果を発見するんじゃないかと思っているわけ。まあ自分が中国にいるからことさらそう考えたくなくともあるのだけど、日本語と中国語(漢語)の関係を再確認するだけでも「言葉の露呈」に新たなフェーズを加えると思う。最近、古井由吉の『漱石の漢詩を読む』を読んだから、余計にそう思うのですよ。

倉数茂 ● Kurakazu Shigeru  
69年生。仏文科卒、教育出版社勤務を経て東西二つの大学院に学び、現代文学から建築までを論じる文字通り「自由(フリー)」な批評家。現在、中国・福建省アモイ大学教員。

青木純一 ● Aoki Junichi  
64年生。文学と音楽、映画、演劇など複数ジャンルを横断、さらには社会との接点を新たな形で模索している。メルマガ「ハトポッポ批評通信」を好評配信中。http://www.mag2.com/m/0000206311.html

読める! めくれる! 検索できる!  
Web上で閲覧できる電子ブック

はらっと

「WB」のバックナンバーは  
ばらっと検索・閲覧!

TRM 東京レコードマネジメント(株)  
http://www.tgn.or.jp/trm/

早稲田文学 はらっと 検索

街でも携帯でも  
読める文学 livedoor®



ケータイlivedoor®では  
オリジナル小説を無料で掲載中!  
WBコンテンツをケータイで!

QRコードでアクセスするが、  
「nv@ld.tv」宛に空メールを送ると、折り返しURLをメールで送ります。

# ハイブリッド・クリティック

中村光夫のねじり



大杉重男

17

中村光夫は近代日本文学に対する最も徹底的な批判者の一人であり、その近代文学批判の論法そのものは、中村自体があまり読まれなくなったと思われる現在においても、さまざまな批評家に受け継がれている。中村の近代日本文学批判が説得力を持った大きな理由の一つに、中村が「本当の西欧」を知っているその理解の深みから近代日本の文学者たちの中途半端な西欧理解を批判しているように見えたことがある。たとえば中村は横光利一の『欧州紀行』を「これほど生彩を欠いた旅行記を私は読んだことがない」と切り捨てたが、横光と入れ替わりにフランスに行つて書いた『戦争まで』は、確かに『欧州紀行』とは対照的に「生彩」溢れる「旅行記」であり、後に中村が『風俗小説論』で横光らを批判する時の自信満々な態度の根拠として、『戦争まで』が『欧州紀行』に対して持つ優位があつたとしても不思議ではない。少なくとも私はそのように漠然と考えていた。

ところが最近横光と中村を欧州体験という観点から比較する文章を書く仕事があり（『横光利一 欧州との出会い』(おうふう)に収録予定)、文献を漁る中に「中村光夫研究」(論究の会編七月号)という本の巻頭論文の玉井崇夫「中村光夫のフランス語——『戦争まで』私感」を読んで驚いた。玉井によれば中村のフランス語は「黙読一辺倒の、かなり歪な、誰もが真似してうまくいくとはいかない独習」によつて培われたものであり、従つてフランスに行つた中村が、『戦争まで』に書かれているようにヴァレリーの講義を理解し、現地のフランス娘や欧州の女子留学生たちとの「直接話法」的な交流があつたとは考えられない。それは中村が『戦争まで』の「あとがき」に記している言葉を使えば「洋行帰りの法螺」であり、もつと端的に言えば「小説」である。それでは中村はなぜそれを「小説」ではなく「旅行記」として発表したのか。それは洋行以前小林秀雄に池谷信三郎賞の選評で「頭がよい」とキャラクターを決められてしまつた中村が、そのイメージを裏切れずに優等生を演じ続けた結果ではないかと玉井は示唆している。

私はこの論を読み、同じ外国語の黙読的独習者(中村にはもちろん遙かに及ばない、いい加減なものだが)として中村に大いに親近感を覚えると共に、自分がそれまで中村の近代文学史に感じていた違和感を理解する鍵を得た気がした。たとえば私は中村と二葉亭四迷という取り合わせがどう考えてもミスマッチだといつも思つていた。その端的な表れは、「た」調の言文一致を確立した二葉亭と「です・ます」調(それはまさに『戦争まで』から始まる中村特有の文体である)で文学史を語る中村との文体的ギャップである。この「です・ます」調は、「た」調によつて男性中心主義的エクリチュールを作り上げた近代文学に対する批評的距離を示すものとして評価されるのだが、そうであれば中村は二葉亭よりも、二葉亭と同時期に「です・ます」調の言文一致小説を試行した山田美妙(国文について)も英文についても、本当の教養がなかつたにもかかわらず、あるかのように偽装し続けなければならなかつた)を中心的に研究するべきだつたのではないか。それは中村自身の「贗物」性と真摯に直面するチャンスにもなつたはずである。しかし中村は美妙についてはほとんど語ることがなく、「本物」の文学者であつた二葉亭が「本物」であるが故に「文学」を放棄することになつたというナルシステイックな物語を『二葉亭四迷伝』において完成させる。それは自己の「贗物」性からの逃避であり、アイデン

Ueno Koushi

# 上野昂志の



# 戯言人生

副校長業務連絡

⑩ 喫煙事情に見るいまどきの大学

久しぶりに「中央公論」(二〇〇九年四月号)を買つたら、小谷野敦が、東大教養学部の非常勤講師を、「雇い止め」になつたという話を書いていた(「さらば東京大学——わが反「禁煙ファシズム」闘争記」)。いま、日本中で大流行の「雇い止め」だが、小谷野氏の場合は、人員整理のためではなく、東大総長・小宮山宏なる人物が、総長決裁とかいう手段で決めた「東京大学喫煙対策宣言」なるものに従わないと明言したためだという。その経緯が、面白いといつては失礼だが、いまの大学を考える恰好の資料として、大変興味深い。

舞台は、駒場の教養学部キャンパスである。そこでまず、「健康増進法」が施行されて一年ほど経つと、研究室が禁煙になつたという。この「健康増進法」なるものが、いかに凄まじいものかについては、すでに高島俊男さんが書いているが(「われら神州清潔の民」お言葉ですが。『同期の桜』所収)とにかく、公共の場と目される場所では、いっさい喫煙まかりならんという法で、高島さんにいわせると、いざれ個人の家以外では、橋の下ぐらいいし煙草が吸えなくなるだろうという話だ。ヤレヤレ。

もつとも、小谷野氏の場合は、それでも秘書の女性が、特別に灰皿を用意してくれていたらしいが、さらに一年後、女子院生が、「割れ窓理論」なるものを持ちだして禁煙を迫つたため、彼はやむなく新たな喫煙場所を求めてさすらいことになるのだが、その経緯は省く。ここで、わたし自身の経験を書くと、わたしは、法政大学の大学院で兼任講師(非常勤講師をこう呼ぶ)をやっているが、三年ぐらい前までは、大学院棟の何階かの廊下の隅に喫煙コーナーがあつたのだが、いまは、それがすべて撤去され、建物の外に灰皿が一つ置いてあるだけとなつた。わたしの場合は、夜間に一コマやるだけだから、授業の前後にそこで一服するだけで、そそくさと帰つてしまうのだが、東大駒場では、その野外での喫煙も禁じたというのだ。

昨年の八月、小谷野氏が、図書館での調べ物を終えて、人影も少ないキャンパスを煙草を吸いながら歩いていたら、自転車に乗った老人がやってきて、ここは禁煙だからといったことから、小谷野氏との間で、相当に理不尽なやりとりが行われたようなのだ。理不尽というのは、むろん、件の老人すなわちSMという名の化学の教授の言い分で、小谷野氏が、分煙でいいのになぜ全面禁煙になどするのか、といつても、法律で決まっているの一点張り。健康増進法にしても、全面禁煙にするなどとは書いてない、と小谷野氏が反論しても、ルールを守らない人は云々といひ、挙句は、学部長室に行きましよう、脅しまがいのことまでいったというのだ。

東大の「喫煙対策宣言」は、キャンパス内の煙草の販売を禁止し、さらに「喫煙者に対して禁煙指導等の支援をする」という文言があるらしいが、問題のSM教授などは、おそらく、この総長発の「宣言」の忠実なる僕なのである。小谷野氏は、この文言は、憲法に定める個人の権利としての、幸福追求権および平等権の侵害だといふのだが、それにしても、この「禁煙指導等の支援をする」というお為ごかしの口ぶりには、怖気をふるうね。煙草など吸う悪い子が正しい道に進むよう、助けてあげようね、というわけか、気色悪い。むろん、この背景には、健康は素晴らしいという健

# 廃墟建築士

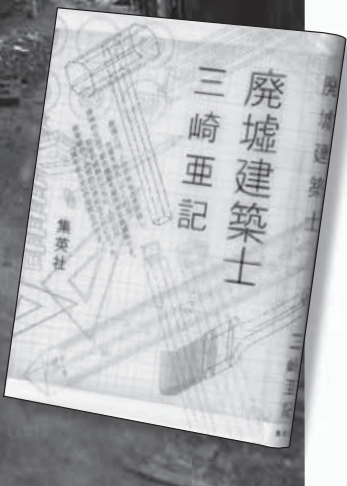
## 三崎亜記

発売中●定価1,365円(税込)

大好評  
重版!

建物を巡って現実と非現実が同居する奇想中編集。

ありえないことなど、ありえない。不思議なことも不思議じゃなくなる。



廃墟を新築する建築家の私。だが偽装廃墟が問題に…表題作。防犯のため、市議会は全ての建物の7階だけを撤去すること…「七階闘争」等。日常の見慣れた風景が一変する4編。

集英社 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

ティティを保つための防衛機軸の発動だったと考えると納得できる。そして中村が作り上げた二葉亭中心主義文学史観の支配下にある現在、私たちはそれ以外の可能性を考えようと思っても、そのための言葉を持つていない。実際二葉亭のオルタナティブとしての美妙のテクニクは「文学」としては確かに全く読むに耐えない(また文学者としての美妙の在り方も倫理的に受け入れがたい)。だが「マトリックス」ではないが、この読むに耐えなさを近代日本文学の本質にある「現実界の砂漠」ではないのか。

水村美苗の「日本語が亡びるとき」を読むと、中村光夫のねじれが現代日本においても再生産され続けているのを感じる。もちろん水村の西欧体験を「洋行帰りの法螺」と言うのではなく、その言語体験の真剣さを疑うつもりはないが(水村の場合、むしろ英語体験の方が本物で、日本語体験の方が贗物めいて感じられるのが問題である)、英語帝国主義への抵抗として水村が称揚する日本の近代文学がもたら夏目漱石であるのを読むと、日本の近代文学を漱石によって代表させることが疑われない時点で(実際そのような文学史観が確立したのはせいぜい一九八〇年代になってからである)、既に「日本語」も「日本語文学」も水村の中で亡びていると思わざるをえない。水村が問うべきなのは日本語の国際的格付けといった抽象的な問題ではなく、自身の日本語の人工性・贗物性ではないか。

ちなみに水村よりは遙かに高次の水準においては「衰弱」を憂える発言を繰り返している古井由吉「漱石の漢詩を読む」にも同様の危惧を覚える。古井は今でこそ伝統的日本文学の保守本流のように語られているが、そもそもは翻訳文学の人工性を極限的に突き詰めた場所から小説を書き始めたはずだ。いずれにしても「文学者」であれば、学校教育や権力の庇護に頼るのではなく、自身の言葉の力で優れた「日本語」「日本語文学」を作る努力をするのが本筋である。♫



大杉重男 ● Osugi Shigeo  
65年生。主要著書『小説家の起源—徳田秋声論』『アンチ漱石—固有な批判』。



上野昂志 ● Ueno Kouichi  
41年生。批評家。短く切れ味の良い批評で映画・写真・文学・社会を捉え続けている。主著に『戦後60年』など。  
<http://www.amudesu.co.jp/taasogae/>

康幻想と、その延長としての健康イデオロギーがあり、それがいまや国策にもなっているという事情があるわけだが、もともと健康は個人の権利ではあっても、義務ではない。それがいつから義務になったのか!? しかも小谷野氏が主張するように、排気ガスを出す車のほうは野放しで、なぜ煙草の煙だけが禁止されなければならないのか。まったく理不尽きまりないが、それがいま、日本を代表する大学で堂々とまかり通っているらしいのだ。

その後、小谷野氏は、学部長と総長宛に、「喫煙対策宣言」は違憲であって従えないという趣旨の手紙を出したが、ナシの礫で、結局、規則に従わないのなら「雇い止め」にするという結論だけを押しつけられる結果となったのである。つまり、問答無用というわけだ。

いままらなからではあるが、それにしても大学の退廃ぶりは凄まじい。煙草を吸わない人にとっては、たかが煙草と思うかもしれないが、ここに見られる強権的な体質は、たんに煙草に留まるものではないし、東大に限ったものでもないだろう。四十年前の「大学解体」は、紐秀実に従うまでもなく、すでにより悪く実現し、幻想としてのアカデミズムが崩壊したあとは、実学とか称して、なんのことはない専門学校のお株を奪つての学科やカリキュラムで人集めに狂奔し、あとは憲法違反もなんのその規則づくめで、外面を取り繕おうとしているのだ。お陰で、われらが専門学校のほうはおまんまの食い上げに直面しているわけだが、いったい、大学はどうなるのかね。小谷野氏は、自分のように立場の弱い非常勤でなく、常勤の教授たちに闘って欲しいというのが、実際、この惨状に声を上げる教授はいないのか? まあ、いうだけ空しいという思いのほうに先に立つというのが、正直なところだが。♫



ノブとテツヤ

わたしの主義として、どこそで何を食べてと不用意にレストランの名前を出すのはいかにも成金趣味のようでもあり、これまで禁じ手としてきた。だが今回だけは一度だけ禁を破って、二つの卓越したレストランについて書いておこうと思う。ノブとテツヤという創作日本料理店のことである。

初めてノブで食べたのは、ニューヨークのトライベッカにある店においてであった。ロバート・デ・ニーロがご鼻屑の日本料理店だといわれて案内されたことを憶えている。そのとき何を食べたのか、正確には記憶にないのだが、お刺身や日本酒がきわめて洗練された形で次々と目の前に並ぶのを、うっとりとした気持ちで眺めていた。アヴォカドを用いた料理があり、これはペルー料理をうまく援用しているなどという印象をもった。この直感は正しかったようである。主人のノブさんは本来がリマの日本料理店で働いていた経験があり、その際ペルー料理の素材や料理法、色彩の演出などを学んだのだと後で知らされた。

ノブは世界のいたるところの大都市にある。ニューヨークから東京に戻ったわたしは、ある時香港の映画人から「ノブで食事をしよう」と誘われた。ノブは南青山の246のわきに堂々たる館を構えていた。ここはウェイターの誰もが英語を話すから便利なのよと、わたしの友人はいった。わたしたちは竹筒に入ったサケを呑み、前回と同じようにアヴォカドの料理を食べた。ニューヨークでノブに足を向けることはセレブへの道に近づくことであったが、東京のノブも負けじとそうした演出を凝らしていた。不思議な気分だった。日本にいて日本料理を食べていながら、そこが世界のどこでもないような気がした。原因のひとつは、客の大半が西洋人で、どこからも日本語が聞こえてこなかったからだろう。値段はそれなりに高かったが、ノブはあちこちに支店を拡げているらしく、入口の壁にはラスベガスとロンドンの支店の写真が、店主とデ・ニーロの並んだ写真の隣に掲げられていた。

テツヤで食べたのは、学会でシドニーを訪れた時である。いや、この表現は正確ではない。テツヤはシドニーにしかないからだ。日本の著名な料理写真家の紹介がなかったとしたら、わたしは世界でもっとも予約を取ることが難しいというこの店に入ることはできなかっただろう。というより最初から物怖じしてしまって、足など運ぼうとしなかったかもしれない。テツヤではタスマニア

の生牡蠣と太平洋のトラウトを食べた。血が変わるごとにそれに合わせたオーストラリア・ワインが供され、コースをすべて終えた時には3時間半が経過していた。わたしが食べている近くの席では、ドイツ人が店のドキュメンタリー映画を撮っていた。

この店の食材のすべてはタスマニアを中心とした近海のものなのですと、店主のテツヤさんはいった。彼はある値段を提示した。それ以上の値段を設定すると、料理ではなく値段を食べに来るようなお客さんばかりになってしまいますからね。わたしがこの値段でコースをお出しできるのも、食材探しに無理をしないからです。テツヤさんは味の絶妙さを買われて、東京でも腕前を披露しないと誘われるようである。だが気が進まない。東京でシドニーと同じレベルの料理を出すためには、食材を無理して捜さねばならず、結果として3倍ほどの値段設定になってしまう。それはテツヤさんの主義に反することなのだ。わたしは自分が管轄できる範囲でしか料理は作らないのですと、彼はいった。というわけでテツヤは世界中に一軒しかない。人はテツヤさんの料理を賞味するためには、シドニーまで足を運ばなければならないのである。

ノブとテツヤは、いずれもポストモダンの日本料理を出すという点で共通している。だがその調理の姿勢は対照的である。ノブは世界中に支店を出し、セレブへの階段としてのレストランという雰囲気強く演出している。基本となるのは日本とペルーの折衷様式である。テツヤはシドニーを一歩も離れず、現地の食材に拘り続ける。だが主人はしばしば日本を訪問し研鑽を怠らない。わたしが驚いたのは、通いなれた月島の居酒屋にテツヤさんが最近出没しているという噂だった。正直に言ってこれにはびっくりした。恐るべしテツヤ！

日本料理が日本を離れて独自の発展を見せるようになって久しい。この二つのレストランの対照的な進路は、ところで日本文学の隠喩となりうるだろうか？

53年生。宗教学・比較文学を学び、日本の大学教授であるとともに韓国・アメリカ・イタリア・パレスチナなど、世界中を放浪する文学者。『貴種と転生』は最も早い中上健次論のひとつであり、その後の中上論にも多大な影響を与えている。映画についても充実した著作を次々発表するほか、都市・美術・音楽・料理・民族差別・漫画と、幅広い活躍領域を持っている。主著に『月島物語』『映画史への招待』『モロコシ流譚』など。

ビールの泡 ⑦ 早稲田

大久秀憲 Ohisa Hidenori

72年生。早稲田文学新人賞、すばる文学賞ダブル受賞の、元沼再チャレンジ小説家。同時期の綿矢・金原旋風も遠い出来事のように、はやくも老境に達した作風を淡々と保つ。夫婦で一晩一樽のビールを飲み干す日々。

ビールの泡ということであるという学生のころ、高田馬場のさかえ通りにある居酒屋をサークルの飲み会でよく使った。人数があるのであらかじめいちばん安いコースをたのんでおくのだが、いってみるとすでに二階の座卓に冷たい料理が並んでいるのはいいとしても、これからビールかけがはじまるわけでもないのに、ケースにはいった瓶ビールの栓がすべて抜かれてあるのが気になった。

ここのビールは泡がたたない、と誰かがいった。なぜって学生には一般客の飲み残しを貯めて貯めたのをあおして出しているからだ。貯めたので間に合わなければ水で増やしている。いや、そんなことをしてはかえって手間だろう。だから、そもそも土台からしてビールではないのだ、と誰かが応じた。飲んでみて、僕はどちらの意見もたいたいような気がした。

二次会をたいていその通りの奥の奥にある割烹料理屋に流れた。学生が割烹とは生意気だが、料理が出てきたためではなく、柿ピーなどをかじりながら、帰りたい何人かでカラオケに興じた。僕の持ち歌の筆頭はコロムビア・ローズの『どうせ拾った恋だもの』だった。貸し切りの座敷に飲み放題で朝までいられて、それがひとり千五百円とかで、良心的なのか捨て鉢になっているだけなのかよく分からない店だった。

そのころの僕のビール量は、まだ駆け出し時期だったこともあり2.5リットルが限界だった。あるときどれだけ飲めるかためしにやってみた。かなり酔って、最後はアパートの部屋の空のバスタブのなかで飲んでた。

大学のごくちかくに住んでいた。大学進学時の僕は、なんとしても徒歩でキャンパス通いがしたい、という青雲の志を抱いていた。志のスケールが適当だったために、すんなり早稲田に部屋を見つけることができた。

大学は講義と講義のあいだに空き時間ができる。大学の味は空き時間にあるのだといまでこそ思うけれども、僕は時間に空きができればそそくさと部屋に歩いて帰り、なにをやるかというと、眠っていた。

講義一コマ分の一時間半あれば、いちおう納得のいく眠りが得られた。これが基本一単位で、二コマ空くとなれば二単位を眠った。時間にあわせて器用に眠り分けることができた。

眠くて眠っていたのなら、あとになにがあろうと眠りつつけていただろう。寝過ぎて講義に遅刻したことはないこともなかった。僕は眠りたくて眠っていたのではないようだ。空いた自由な時間になにかをしようともせず、そのくせなにもしないことにも耐えられなかった。要はふて寝なのだが、眠りそのものはふしぎとひたすらやすらかだったように思う。

大学には八年いて、うしろ半分の四年はひとつの講義だけを取り、落第をつづけた。週一コマで、あとはすべて空き時間である。習性で空き時間は眠ることになっている。だから昼はずっと眠っていた。かわりに夜どおし起きていた。夜は電気をつけないと暗い。あたりまえだが、そんなことが気になって、夜眠れないのは昼に眠ったからなのに、不眠の気分が夜の明けのを待たたりした。

このあいだ用があって早稲田にいった。引越しの手伝いだった。いまは電車で行く早稲田である。

住んでいたあたりを歩いた。よくいった中華屋がなくなっていた。夫婦でやっている店で、とにかく油が悪かった。その油で自動車が動いたという目撃談があるほどだ。うまいまずいはどうでもよく、もしまずいのだとしても、油のせいで気がつかないといったふうなものを腹いっぱい食べさせた。

いまから何年前だったか、その店のとなりにある写真館が火事で焼けた。ニュースできいたのでは、撮影技師は助かって、二階で奥さんがひとり焼け死んだらしかった。僕はその写真館で、入学したての四月、学生証の写真を撮った。猫がいて、いまにもひざにのってきそうだったのを思い出す。

**WBは全国  
42都道府県  
+海外4都市  
で配布中!**

Waseda Bungaku Free Paper  
**WB** vol.16

2009年3月31日発行(年4回刊)

Published by 大日方純夫  
 Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)  
 木村安希子 青山南  
 下田桃子 江中直紀  
 武川葉月 貝澤哉  
 寺井ゆい 十重田裕一  
 近藤景亮 三田誠広  
 西條弓子 山本浩司  
 横山絢音  
 朴文順  
 窪木竜也 市川真人 (Concept & Direction)

Design 奥定泰之 momoko  
 Photograph 北島敏三 (photographers' gallery) p01-17  
 Illustration 鶴谷香央理 p19-24  
 Special thanks to 青木誠也 山崎貴之 和野潤

編集・発行 早稲田文学会/早稲田文学編集室  
 102-0042 東京都新宿区早稲田町 27-1F  
 TEL/FAX 03-3200-7960  
 Mail wbinfo@bungaku.net

印刷 凸版印刷株式会社  
 112-8531 東京都文京区水道 1-3-3  
 TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676  
 http://www.toppan.co.jp/

▽こん「べ、別にあなたのためじゃないんだから  
 ね!」/ずどーん/兵十「ごん、お前だったのか」  
 ▽……ダメだ、「明える国語教科書」失敗。教科書  
 について調べていると、「明える国語教科書同盟」  
 というサイトに行き着いた。「こころ」「舞姫」「山  
 月記」等のカップリングを楽しむのだから、その読  
 み自体がおもしろいか否かはおくとして、いずれに  
 せよ、近年、顕在化したキャラ読みは、今のアン  
 ケートにも見られると思う。その行き着く先はまだ  
 見えないけれど、キャラクターで読むことで、教科  
 書の読み方が広がればさいわいです。そこからさ  
 らに、回答者の皆さん=キャラクターの作品にも手  
 を伸ばしていただければ、とてもうれしいです。(K)

▽「WB」第2期開始から1年半、創刊からは3年半、  
 かつては「metro min」や「R25」だけが目立った  
 読みもの系フリーペーパーも多くなり、文学や思想  
 を扱う冊子も増えてきました。なのでそこは他誌に  
 任せて、「WB」は次号から、もっとこどもたちも楽  
 しめる、新しいカタチに移ります。▽タバコの書が  
 声高に言われ、大学生の薬物使用が問題視されても、  
 ただ禁じるだけでは、いまの当事者にも未来の当事  
 者たちにも伝わりません。「赤信号はなんで止まる  
 の?」「お酒はなんで飲んでもいいの?」と聞かれて、  
 「規則だから」では返事にならぬ。いったいなぜ  
 ねがいけないのか、そもそもルールはなぜできたの  
 か、そういうことをこどもやオトナが調べたり考え  
 たり、ときに再検討する契機になる——そんなふう  
 に「自分で考えること」に向かって読まれてゆく(そ  
 もそも文学や思想ってそういうものです) 冊子を第  
 3期の「WB」はめざします。▽ひとまず終了をお願  
 しいした連載陣の皆さん、写真でお世話になったpg  
 やmamiの方々、ありがとうございました。▽今号は、  
 企画のあとにはほほぜんぶクボキ(と学生スタッフ)  
 に任せて、先の計画を立てたりとと会ったり、「べ、  
 別にただ急いでたわけじゃないんだからね!」(ic)

選考の流れ

**1** いまはココ!

1月に締め切りました「第23回早稲田文学新人賞」は、現在選考委員が作品冒頭を基準に、応募総数291作品のなかから一次選考シード作品を選出しています。

**3**

最終候補作(点数未定)を選考委員が精読し、5月末～6月初旬に受賞作を決定。遅めの初夏に刊行の、「早稲田文学3」にて発表の予定です。

wasedabungaku 3  
**早稲田文学 3**  
(09年初夏刊行予定)にて

**発表**

経過報告  
**早稲田文学  
新人賞**

**2**  
シードされなかった全作品を対象に編集室が一次選考を行い、その通過作品とシード作品を対象に二次選考・最終候補を選抜します(4月末頃予定)。

くわしくは...

詳しい進行状況は、早稲田文学サイトにて随時お知らせします。

**早稲田文学編集室**

Tel/Fax 03-3200-7960  
 Mail wbinfo@bungaku.net  
 www.bungaku.net/wasebun/



選考委員  
azuma hiroki  
**東浩紀**



2号に関するお問合せはこちら

東浩紀・宇野常寛ほかゼロ年代批評家たちの13万字討議、川上未映子の、演奏つき朗読映像収録の文芸誌初DVD。1950年代と2050年代をつなぐ老作家の来日特集ほか尖端と歴史を結びつける復刊第2号好評発売中!

- 〈特集〉ミシェル・デュトール
- 〈小説〉青木淳悟/円城塔 鹿島田真希/間宮緑
- 〈評論〉福嶋亮大/大杉重男/石川義正
- 〈対談〉田中りえ × 耕野浩一
- 〈討議〉十時間連続シンポジウム  
小説・批評・メディアの現在と未来をめぐって  
大澤真幸/大森望/豊崎由美/千野帽子  
中森明夫/福田和也/渡部直己...
- 〈映像〉ミシェル・デュトール モビエール  
川上未映子 朗読 戦争花嫁 ほか



A5判・474P 定価1500円  
 発行・早稲田文学会 発売・太田出版

▼日本語での文学・哲学・芸術表現の普及をめざす「WB」では、主旨に賛同・応援して下さる個人や企業の皆様からの広告出稿や配布場所提供等のご助力を求めています。関心を持って頂けた方は上記の小誌編集室までご一報頂ければさいわいです。

# 俺の人生に時給くれ!

池田雄一

連載⑩珍妙! DIY方式のガン治療

69年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。

よく知られた話だが、ナチス政権は「健康」というものに多大な関心をもっていた。癌にたいしても、組織的な対策がとられた。タバコと肺癌の因果関係について、どこよりもはやく着目したのもナチスだったし、アスベストの問題にもいち早く動いたのはナチス政権下にあったドイツである。また、ナチス・ドイツはエコロジー先進国でもあった。自然保護に力を入れ、有機農法についても、かなりマニアックな政策をとっていた。『ためしてガッテン』のような、健康にかんしての情報を、純粋なエンターテインメントとして楽しんでいる現代人は、まさにナチス的な世界観が血肉化されたということになる。もっとも、そうした世界観が、どの程度「ナチス」的な文脈からできたのかについては、歴史的な検証が必要だろう。健康と自然との共生というのは、ナチス・ドイツにかぎらず、国家というシステムが稼働するためには、必要とされる物語かもしれないのだ。

そうしたなか、ひとりのユダヤ系ドイツ人の医師が、ナチス政権をさけるため、1933年にミュンヘンからニューヨークに移住し、診療所をたちあげた。癌の食事療法で有名な、マックス・ゲルソン博士である。自らがあみだした食事療法によって、彼はまず自分の偏頭痛を治療し、それから多くの皮膚結核の患者を治療し、またシュバイツァー博士の妻をはじめとする多くの肺結核の患者を治療した。そしてアメリカに移住してからは、癌の患者にたいして、食事による治療をこころみることになる。

ゲルソンの治療は、食事と「解毒」のみによって癌の完治をめざす、という非常にアグレッシブな治療法である。一時期はやった「コーヒー洗腸」は、もともとゲルソンが患者の解毒としてはじめたものだった。食事療法というと、どちらかというと患者に「癒し」をあたえる、というイメージが強いが、ゲルソンの食事療法はその真逆をいっている。具体的には、徹底的な塩の制限、完全なベジタリアン生活、1日13杯の新鮮な野菜ジュースの摂取、1日3回の「コーヒー洗腸」、ヨード液などサプリメントの摂取など、ゲルソンが

よかれと思っているものはすべて「ゲルソン療法」としてとりいれられている。自分で行うとすると、まるで自己管理の悪夢のようにも思える治療法である。

ゲルソンは、癌も糖尿病のような慢性的疾患であると考えている。そのメカニズムはこうである。体内にあるナトリウム系のミネラルと、カリウム系のミネラルのバランスが崩れると、細胞の代謝が異常になり、癌が誕生し生存できる環境へとかわる。現代人は味覚の刺激を求めあまり、塩をかつけないほど過剰に摂取している。したがって、本来は細胞の外側にあるべきナトリウム系ミネラルが細胞に侵入し、代謝の異常をまねくのだ。癌は生活習慣病だということになる。体内環境を劇的に変えることによって、癌を死滅させようというのが、ゲルソン療法の要諦だろう。

はたして効くのかどうかはさておき、こうしたゲルソンの考え方は、あまりにも面白すぎる。ゲルソンの著書である『ガン食事療法全書』（徳間書店）に眼を通すと、まるでSF小説を読んでいるかのような気分になる。やたらと知的好奇心がくすぐられるのだ。もともと癌という病気がたいがらSFホラーのような存在である。その恐怖に対抗するために、癒しや努力よりも、こうした知的好奇心がはるかに有効だ。有機栽培のニンジンが「貧者のイレッサ」になるかどうかは、この好奇心にかかってくる。

そう考えると、ゲルソン療法は、究極の Do It Yourself 療法でもある。治療をする側は、自分を実験台にすることを楽しむような人の悪さが必要になるだろう。アメリカでは、ゲルソン療法にかぎらず代替療法が普及している。そのことはアメリカに健康保険制度が導入されていないことと関係がある。この治療が普及するとすれば、農業と環境の問題、治療をする共同体の問題、既存の医学との関係の問題等、クリアしなくてはならない問題が多々ある。そうであるがゆえに、この治療は生政治の問題を考えるにあたっての試金石になる。現代の救民活動は、こうした文脈からでてくるはずだ。♫



# 生田武志

11



Ikuta Takeshi  
64年生。野宿者支援活動。著書『野宿者襲撃論』。連載タイトルは鈴木志郎康の「プアプア詩」に倣いました。ただし、ほくのは「poor」のことです。

シオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』(1900)は、「アメリカ文学のなかでもっとも重要な小説作品の一つ」(訳者・村山淳彦)、「アメリカ最高のリアリズム小説」(ウォルター・ベン・マイケルズ)、そして「ドライサーは今日に至るまでアメリカ最大の小説家」(フレドリック・ジェイムソン)などムチャクチャに評価が高いが、これはいまこそ読まれるべき作品ではないだろうか。

あらすじは、田舎からシカゴに出てきた貧しい娘が工場労働を始めるが、そのうち金持ち男の愛人になる。さらに別の男と一緒にニューヨークに行き、その男は失業してホームレスになるが、主人公は女優として成功し有名人になる、というもの。

今では絶滅してしまったような話者による説明文など(「仕事を探して歩きまわるキャリーのあとについていく前に、彼女の未来が広がるはずである舞台を見ておきたい。1889年のシカゴは、前代未聞の成長を遂げている真っ最中で……)のような、現在の小説ではお目にかかれぬテクニックがいっぱい出てくる一方、記事や論説、手紙文などが雑多に取り込まれ、通常の「リアリズム小説」の枠をはるかに越えてしまっている。

そして、この小説の最大のテーマの一つは「貧困」だ。主人公キャリーがシカゴで求職活動し、工場労働をするシーンなどは身につまされるようなリアリズムで描かれる。そして物語の後半、主人公の一人ハーストウッドが失業し、ホームレスとなってボランティアの世話になったりする場面では、この時期(1890年代)のニューヨークのホームレス問題の有様が「見てきたように」異様に丁寧に描き込まれる。例えば、スト破りへの労働者の抗議の様子は作者自身がレポートした新聞記事をそのまま使っている上、ホームレスのために市民からカンパを集めるボランティアのセリフなども克明に書き込んでいる。

事実、この小説は日本の大学の社会福祉学部で教材として使われている。

ところで、『シスター・キャリー』にあたる本は現在の日本にあるのだろうか。多分ないのではないかと。しかし、「子どもの貧困」については非常にいいものが幾つか出ている。

ほくは釜ヶ崎の日雇労働や野宿の問題に関わっているが、近頃「子どもの貧困」で話をする機会が増えた。そのとき、資料として使うのは、岩波新書の『子どもの貧困』や光文社新書の『子どもの最貧国・日本』というより(どちらもいい本ですが)、むしろ、1999年に起こった「池袋無差別殺傷事件」(「秋葉原無差別殺傷事件ではない」)の新聞記事や、麒麟・田村の『ホームレス中学生』とその兄の『ホームレス大学生』だ。

池袋事件の当時23歳の若者は、高校時代に両親が作った借金で家計が破綻し、地域や学校、行政から支援がまったくされず、大学進学をあきらめ、自動車工場や新聞配達などの仕事を転々とし、時には野宿をしながら働き続けた。そして、自暴自棄となって無差別殺傷事件を起こした。一方、麒麟の田村は父親の借金で家を失い、公園でしばらくホームレス生活を送ったが、友だちの親が家で住まわせてくれ、近所の人たちが家を借りて生活保護の手続きをとってくれた。そして、きょうだい3人で暮らし続け、高校に行くこともできた。つまり、同じようにホームレス状態になりながら、一方は自分と社会に絶望して無差別殺傷事件を起こし、一方は社会への信頼を保ち続け、夢を実現してお笑い芸人になったのだ。2007年、池袋事件の犯人は死刑が確定し、同じ年『ホームレス中学生』はベストセラーになった。

そして、池袋事件の少年が家を失った年も、田村が家を失って公園に住んだ年も、実は同じ1993年だった。われわれは、16年前にも起こっていた「子どもの貧困」の問題に、いまようやく目を開き、直面し始めているようだ。♫

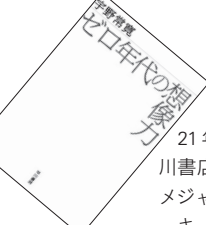




photographers' gallery (pg) <http://www.pg-web.net/>  
→東京・新宿にある、写真家たちの自主運営ギャラリー。単なる写真ギャラリーにとどまらず、レクチャーやシンポジウム、写真集の編集・発行、エッセイや批評の発信、移動展など、「pg」という集団（ギルド）それ自体が「メディア＝媒体」となる活動を続けている。第2期「WB」では、pgのメンバーの作品が交代で、小説側表紙を飾りました。今回は最終回です。

#### 北島敬三◎Kitajima Keizo

54年長野生。01年、自主運営ギャラリーとして photographers' gallery を設立。81年に日本写真協会新人賞、83年に第8回木村伊兵衛賞、07年に第32回伊奈信男賞を受賞。国内および海外での展覧会多数。個展・グループ展に「PORTRAIT」シリーズ（00年～）の「PORTRAITS 1992-2007」（photographers' gallery 東京 2008）、「写真0年 沖繩」（那覇市民ギャラリー 沖繩 2007）ほか。写真集に『NEW YORK』（白夜書房 1982）、『A.D.1991』（河出書房新社 1991）、『PORTRAITS + PLACES』（photographers' gallery 2003）など。



21年ぶりに小説を出版しました！『学校で愛するということ』（角川書店）がそれです。題名どおり学園恋愛小説♡今、いっちゃんメジャーな物語とは何か？ ずばり学園ドラマだ！『ごくせん』、『ルーキーズ』、『ドラゴン桜』などなど。何も物語は小説とは限らない。宇野常寛の『ゼロ年代の想像力』も言うようにドラマ、映画、マンガ、ゲーム等、みーんな物語の一種なんだね。で、視聴率20パーセント以上、つまり毎週2000万人ものニッポン国民が観ていた『ごくせん』こそ、今、我が国でもっともメジャーな物語ってえワケ。けど、これらの学園ドラマって、実はいまだワンパターンな物語を反復してるって思わない？ そう、ある日、突然、型破りの先生がやって来て、学園は大騒動に巻き込まれるってえパターン。我が国テレビの学園ドラマ第1号とも言われる『青春とはなんだ』（日本テレビ）がまんまこのパターン。で、原作がなんと石原慎太郎のだよ！ そっかあ、石原（マッチョ）都知事は太陽族の元祖であるばかりじゃなく、学園ドラマの始祖でもあったのね！ とはいえ、ほら、よく考えてごらんよ。もっと昔に同じパターンの物語があったじゃん。そう、夏目漱石の『坊っちゃん』だ！ 主人公の破天荒な転任教師と、悪ガキの生徒連と、美しきマドンナと、にっくき赤シャツと、ドボケたタヌキ校長と……はは、まんまその後の学園ドラマのキャラが総出演って感じだね。そういや、80年代ニューアカ・ブームの頃、現代思想版『坊っちゃん』の配役を考えたって。坊っちゃん（柄谷行人）、うらなり（浅田彰）、マドンナ（如月小春）、山嵐（栗本慎一郎）、赤シャツ（蓮實重彦）、タヌキ（山口昌男）、野ダイコ（中沢新一）、イナゴの大群（渡部直己、桂秀実、三浦雅士 etc.）……なんてね。それにしても漱石が『ホトトギス』誌に『坊っちゃん』を発表したのが1906年のこと、なんと100年以上も前の物語なのだ！！ それが『ごくせん』、『ルーキーズ』、『ドラゴン桜』の21世紀まで生き延びたとは、やっば漱石先生は偉大ななあ！

こないだ出た高橋源一郎の『大人にはわからない日本文学史』って本を読んだら「おもしろいのは、日本の近代文学の成立が、小学校の成立と同時にということです」なあってフレーズが出てきたよ。もちろん学校なんて寺小屋の昔からあるけどさ、国民国家の皆教育制度が近代に成立してるんだから、当然、近代文学と始まりを同じにしてよね（このへんトートロジー＝同義反復だなあ、近代〈文学〉と近代〈教育〉が同一だなんてさ）。そもそも「早稲田文学」がそうで

# 文学

卒業／入学の季節に  
学校が舞台の物語  
についてお勉強



中森明夫  
NAKAMORI AKIO

しょ？ ほら、「早稲田」って学校と“文学”が並立してる！ 1891年（明治24年）創刊ってちゃあんと『広辞苑』に載ってました。あのさ、ぶっちゃけ学校なんて文学と同じでフィクションさ。でも、それは逃れ難いフィクションなんだ。だって、今や学校に行ったことのない人間なんていないでしょ？ どうして学園ドラマがもっともメジャーな物語になったかといやあ、もはや「学校へ行っちゃった」ということしかみんなの共通体験がなくなったからじゃないかなあ。で、ボクとしちゃ、学校論を学園小説の形を借りてやりたかったってワケ。

たとえばね、学園ドラマには必ず屋上が出てくるよね。屋上に生徒らがたまってしんみり話したりする場面が決まって出てくるよ。ありゃ、なんで？ ドラマだけじゃない、重松清の『ピフォア・ラン』だって、吉田秋生の『櫻の園』だって、ここぞってとこで屋上が出てくる傑作学園物語だったっけ。ボクの小説じゃそのへんにズバリ斬り込んでよ。

あ、角川書店から本が出せたってのもウレシ～なあ。だって、眉村卓『ねらわれた学園』とか筒井康隆『時をかける少女』とか赤川次郎『セーラー服と機関銃』とか、大ヒット映画になった学園小説が、みーんな角川文庫で出てくるからね。ああ、ボクの小説も映画やドラマになって美少女アイドル女優らに出演していただきたいもんです♡

そういや近年、夏帆が主演して超かわいかった映画『天然コケッコー』は、くらもちふさこの学園マンガが原作だったし、ガッキーこと新垣結衣が主演した大ヒット映画『恋空』はケータイ小説が原作で、学校が舞台のパートじゃガッキーが図書館でエッチなんぞしてました（森下愛子と永島敏行が図書館でエッチした78年のATG映画『サード』の反復だね！？ 脚本は寺山修司）。おっと『ごくせん』も『ドラゴン桜』も人気マンガが原作だったし、『花より男子』も『のだめカンタービレ』も『メイちゃんの執事』も、みーんなそうじゃん！ “学園物語”界はこのところすっかりマンガに独占されちゃってる。いや、『坊っちゃん』が元祖なんだから、文学もがんばってほしいね。あっ、そうか、近代文学の終焉！？ なるほど近代という学校（＝文学）が終わっちゃったのなら、ボくら、ポスト近代の校庭でいつまでも遊ぶ“放課後の子供たち”でいようよ！！ ♪

60年生。作家。21年ぶりの小説『学校で愛するということ』（角川書店）を出版！『野性時代』5月号で重松清氏からインタビューを受けました。「朝日ジャーナル」復刊号では2本の座談会に出席しています！！

# 動物徘徊

山本動物  
Yamamoto Doubutsu

1973年東京都生まれ。85年頃ふともごころがつく。以来ずつと動物。それ以前のことはよくわかりません。

「劇」というものは、チョー大胆に抽象化して言ってしまうと、「A」というものがあり、一方に「B」というものがあり、この「A」と「B」がsame spaceでencountしてしまうことで、ぐちゃぐちゃとなんらかの化学変化を遂げて、「C」になる過程を描くものだと思う。とおそらく私ならびに皆様の脳内における「ヘーゲル哲学」ないしは「初心者のためのBL」的な概説本には書いてあるはずだ（もちろん、これは遠近法的倒錯であって、正しくはそのような「劇」の定義から弁証法なり攻×受の構図が生じている）。つまり、「劇」というものは「A」なり「B」といった個別的なものが、「C」という普遍へと至る変化ならびにその時間を表現するものであり、演劇とはそれを俳優たちが演じることによって実現するものと言える。しかし、もしそのような弁証法的な契機を一切欠いたドラマがあったとしたら？ 主体＝人間となるプロセスをなぞりながらもそれを遙かに逸脱し、言うなれば人間未満の動物となるプロセスを示してしまうような演劇があったとしたら？ おそらくそこにはただ空虚な、それゆえに純粋な時間、あたかもケージの『4分33秒』のような、その伝で言うならば純粋な「演劇」が出来するのではないだろうか。そして、それこそが先頃シアタートップスの最終公演として行われたポツドールの『愛の渦』にほかならない。乱交を目的とする裏風俗店に集う男女の一夜を描いたこの作品は、「セックス」を、それもその本来の目的である「生殖」を排し「セックス」だけを物語の駆動因とすることによって、動物がただ動物であるというドラマなきドラマをまさに現実化してみせる（その意味では、中盤以降のアクセントとしてあるスワッピング希望の夫婦の関入は、やや予定調和的な「ドラマ」であり、なくもがなではなかったか）。ただ、それって実験のための実験であって、ぶっちゃけ『4分33秒』がやはりある種の実験的な音楽であり、毎日聴きこんだりしないように、面白くないんじゃないか？ という疑

念は生じるだろう。もちろん、それぞれのジャンルの構成要素をひたすらに純化していくことを旨とするモダニズムの芸術原理の前に、主観的であいまいなエンタメ性など不要ではあるのだが、あにはからんやこれが大変面白いのだ。なぜか？ 動物の生態ドキュメンタリーでしかないかに見える（ちなみにポツドールにはそのものずばりの『ANIMAL』という傑作もある）『愛の渦』にはたしかに弁証法的な主体（＝精神）のドラマは存在しないが、身体は存在するからである。演出も兼ねる三浦大輔は、ただ本能のままに動く動物たちを静態的に捉えるカメラではない。能動的に、それぞれの動物たちが自身のポジショニングをいかに意識し、同性や異性の他の動物たちとの関係性（距離や動き、しぐさ）や地形とのインタラクションからのフィードバックによって、いかに行動していくかというアフォーダンス的な環境を緻密に構築していくのだ。「精神」のような目的を欠いたこの身体は、ただ出来事がひたすらに起こり起こってきりがない。のと同時に出来事間の序列が存在しなくなるので、出来事のひとつひとつが十全なドラマとして輝きだすのだ。ここから話を大きく飛躍させれば、九〇年代から長らく演劇のモードを支配してきた「静かな演劇」はここにきてひとつの転機を迎えているように思われる。それは言うなれば「静かなことば」、うるさい身体は演劇が現在勃興しつつあるのではないかということだ。これは必ずしも身体の復権ということではない。それは単なる六〇年代的な祝祭への自堕落な回帰にすぎない。あくまでも「静かなことば」とセットになった上での「身体」の浮上であり、ことばでもなく身体でもないそのあわいに新たな演劇の姿がいま模索されているということなのだ。ここで本来なら、同じベクトルの探求を行っている中野成樹＋フランケンズやサンプルなどの注目すべき若手劇団を並べて論じるべきなのだが、残念ながら紙幅が尽きた。♪

たなか  
**田中りえ**

「孔乙己」魯迅



小学校から、高校まで、教科書をほとんど、読んだことがない。国語の教科書ぐらい、読めば、よかったのね。よくも、毎日授業中、ただ、ぼーっとすわっていられたものだ。でも、高校の教科書にのっていた、魯迅の「孔乙己」は、やはり、読んではいないが、おぼえている。国語の松本先生が、全文を、読んでくれたからだ。松本先生は、おとなしいかんじの男の先生だったが、朗読する声は、低くよくひびいた。話しの長さも、いっしょに読むのに、ちょうどよかった。「孔乙己」は、中国の居酒屋が舞台で、孔乙己と呼ばれている。教養はあるが見ずばらしい、酒好きの男のはなしだ。店の下働きの小僧が、皆といっしょに、孔乙己をバカにしながら、彼のことを気にする。わたしはそんな小僧のことが気になった。しかし、そんなことを感想文に書けばよい、ということ、思いつかなかった。「孔乙己」についての感想文も、なにも書くことがなくて、こまったことを、おぼえている。作文も読書感想文も、ぜんぜんダメだったけど、わたしは、それで、よかったみたい。

ますのこういち  
**柘野浩一**



「どろんこ祭り」今江祥智 / 「ごんぎつね」新美南吉 / 「夏の葬列」山川方夫

今江祥智「どろんこ祭り」。せつちゃんはおきやんでるで男の子みたい、三郎は女の子みたいと語り始められて、どろんこ祭りのさなかに三郎が男らしい行動をとり、せつちゃんが女の子っぽく一面を見せる、というところで終わる。読んだ当時は何の疑問も持っていなかったが、新宿二丁目で飲んで帰ってきた今朝の頭で思い返すと、「女の子っぽく男の子が女の子っぽく、教科書の余白に鉛筆で、ごんが突然生き返ったという結末」新美南吉「ごんぎつね」。結末が気に入らなくて、教科書の余白に鉛筆で、ごんが突然生き返ったという結末を勝手に書き足して、友人たちに回し読みさせていた記憶があります。山川方夫の「夏の葬列」が教科書に載っていると噂に聞いたのですが、立ち直れないほどの後悔の気持ちをお子たちに疑似体験させるのが好きなのでしょ、教科書つくる人。

しばさきともか  
**柴崎友香**



「ごんぎつね」新美南吉

いちばん覚えているのは新美南吉「ごんぎつね」。小説そのものもとても印象に残っていて、授業中でなくてもつい思い出してしまうような感じだったので、最後にきつねの「ごん」が死んでしまったか死んでいないかについてクラス内で論争となり、まるまる1時間話し合いました。わたしは「死んでしまった」派というか、この書き方ではそれ以外考えられないと当然のように思っていたから、「死んでない」という考えにかえってびっくりしました。でも、「死んだ」とはっきり書いていないから「死んでない」派のほうが確かな数としては多かったと記憶しています（生きてほしいという願望もあったのだと思います）。どっちだと考える方が「正解」ということではなくて、授業の進行を止め、1時間を全部使って好きなように子どもたちだけで話し合いをさせてくれた先生が、今思えばありがたかったなと思います。

たにざきゆい  
**谷崎由依**



「檸檬」梶井基次郎

高校の授業で、梶井基次郎の「檸檬」をやったときのこと。国語の先生は、文学少女がそのままおとなになったみたいで、それは詩人だった。わたしたちとおなじの高校の出身で、それは詩人の荒川洋治とおなじだった。先生は荒川洋治を、荒川先輩と呼び、荒川先輩が梶井を教えてくれたの、と言った。思い出を語る彼女の口調に時間はたちまち過ぎ、いつしか場面は高校の庭で、彼女と若き日の荒川洋治が詩について語り合っている（授業中のわたしの白昼夢では、なぜかその場面は中庭だ）。羨ましい。そんな先輩、わたしも欲しい。それから先生の母は、綺麗だからというだけの理由で両親いっしょに檸檬を買って帰るような、そんな人だという話もしていた。進学校にあって、小説とか文学のことをきちんと考える先生だった。受験より文学を大事にしていた。わたしの書く文章にも厳しかった。「檸檬」のことを考えると、その先生を思い出す。彼女の「檸檬」を共有できて、わたしはよかったと思う。

むらたさやか  
**村田沙耶香**

「おじさんのかさ」佐野洋子



教科書で出会った作品と言われてすぐに思い出すが、佐野洋子さんの「おじさんのかさ」です。りっぱな傘をささずに持ち歩くおじさんの姿に思わず笑っていると、不思議な歌が聞こえてきます。歌に誘われておじさんが傘を開くと同時に、なにが不思議な瞬間を疑似体験していました。けこういう強い感覚を文字から得たのはこれが初めてだったように思います。授業では班ごとに前に出て、作品についていろいろと発表しました。けれど私はおじさんと一緒に感じた体験について、決して口にしませんでした。生徒は教科書で出会った作品の中に、何か特別な秘密を見つけたとき、それを誰にも言わずにこっそり持ち帰る権利があるのだと学びました。それから何回か教科書やテストの中で出会った作品と、秘密を共有することがありますが、私はこの最初の体験が一番強く記憶しています。

いとうせいこう  
**枕草子** 清少納言



中学だったか高校だったかは覚えていないのだが、ともかく国語の教科書を年度の初めにもらった時のことである。大好きな教科だったから、私はウキウキしてページを適当に繰った。そして、「あ、清少納言！」と瞬間トキメいたのである。タイトルのわけでもない。なのに、私は明確に清少納言の文章がそこに印刷されていたわけでもない。実際に、「枕草子」が掲載されていた。彼女とわかった。実際の、私は究極的には清少納言の選ぶ文字の順番そのものが好きなのに違いない。となると、国語の教科書は単に読むものではない。まず、絵みたいに見えるようにとらえて一生懸命に書いて、その作品を書いた人があなたをとらえて一生懸命に書いてくれたら、

ひぐちなおや  
**樋口直哉**

「小僧の神様」志賀直哉



高校生になったばかりの頃。国語の教科書に志賀直哉の作品があった。自分と同じ名前である。僕の名前はこの作家から勝手に貰ったらしいので、何となく親近感を持ってた。たしか「小僧の神様」が掲載されていたと思う。内容はまあとくに面白いものではなかったし、結末は「いや、この小説はこういう結末を書こうかと思ってたのだけじゃなく、結局は「いや、この小説はこうだからここで筆を置く」という作者の独り言で終わるの、それじゃ小僧がかわいそうだからここで筆を置く」という作者の独り言で終わるのである。なんじゃ、こりゃ、という感じだった。でも、今ではこんな風な終わらせ方ができる自由さこそが小説というメディアのいいところなんじゃないかと思う。高校生の頃はよくわからなかった作家の作品も、今の僕ならほんの少しだけ理解できるよう気がする。だから、教科書で読んだ小説がつまらなくても、後で機会があれば読み返してみてください。違って見えるかもしれませんが、少なくとも僕はそうでした。

かしまだまき  
**鹿島田真希**

「教室205号」大石真



この小説は児童文学に珍しい「お受験」もの。私が塾の教科書で読んだものだ。中学受験をする子供たちを巡る友情と、それを引き裂こうとする下等母親たちが登場する。中もの。また、子供たちには早すぎる、受験を体験させることによって、子供たちの早熟ぶりがうかがえる。それぞれの登場人物が、身体の障害、父親の再婚、水商売をする母親などの問題を抱えている。子供たちは、そんな障害を乗り越えながらも、まだ乗り越えられない親、大人たちにたいして、実にしらけた、冷静な目を向けている。物語のラストは、教室205号と呼ばれている、使われていない教室に、立てこもる。子供は、大人が考えている以上に、思想が発達しているんだなあと思う1冊。大人になった今、読み返してみたい。

# 伊藤比呂美

「浄瑠璃寺の春」堀辰雄  
「走れメロス」「貧の意地」ほか太宰治

今の今まで、亀井勝一郎の「浄瑠璃寺への道」だと思っていたもの、しらべてみたら堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」だったようです。高校時代に堀辰雄にはまっていたのは、これがきっかけだったんだと今更ながら考えました。そしてやはり太宰治。何を讀んだのか覚えていないんですが、たしか高校一年の教科書で「走れメロス」か「貧の意地」。あんまり吃驚して、本屋に走り、「晩年の妻」を讀んで、また走り、「人間失格」を讀んでまた「晩年」を讀み返し、「ヴィヨンの妻」を讀んでまた「人間失格」……それからどっぴりと浸りきって気がついたときには高校生としてにっちもさっちもいなくなっていたのであります。

# 東浩紀

教科書で讀んだ小説といえば、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」とか新美南吉の「ごんぎつね」とか井伏鱒二の「山椒魚」とかあと夏目漱石とか宮沢賢治とか志賀直哉とか……なはずなのですが、正直、小学校から高校まで、全12年間を通してまったく印象に残っていません。その理由は、教科書の内容というよりも、むしろ単純に活字の大きさにあったような気がします。ぼくは小学生低学年のころから文庫本を讀んでいたのですが、教科書の活字はあまりに大きくて、読者をバカにしているようにしか感じられなかった。活字を讀む、というのは（一部の）子どもにとってちよとした背伸びの感覚と結びついているので、そういう要素も重要だではなくてむしろ図書室です。小学校のころは、江戸川乱歩とか、あとの経験はいまのぼくの重要な基盤になっている。そもそも小説は趣味が分かります。教科書は評論の比率を増やして、小説の讀書経験はむしろ図書室の蔵書でカバーするといんじゃないか。アンケートの答えから遠く離れてしまいましたが、そんなふうに思います。

# 新城カズマ

「最後の授業」アルフォンス・ドーデ ほか

編集「さて新城さんが紹介して下さるのは、アルフォンス・ドーデ「最後の授業」ですが  
新城「はい。まさに教科書的な良いお話です。ドイツに占領されるフランスの片田舎、最後の授業、愛国心の発露。ボクも授業で感動しました。でもあの地方って元々ドイツ領だったんですね。というところは……」

編「あーそういう大人な話は今日のところは」  
新「いやいや、子供を子供扱いしちゃいけませんよ。大人の事情なんかお見通しです。だから「最後の授業」と併せて読むべきはジェームズ・クラベル『23分間の奇跡』。この短さとソクソク感は、星新一の短篇にも似てますね。機会があったら、星新一もぜひ。えーと何の話だっけ、ああそうだ。短篇もいいですが、長篇ならばヒギンズの『鷲は舞い降りた』！ 登場する男たちが最高です。あとライアルの『深夜プラス』。大学卒業までには読んでみてください。ほんとに面白いですよ！」

編「いや、ですからドーデを」  
新「ドーデ？ ドーデなんざあドーデもよろしい。ヒギンズといえばフォレストも良いですね。『海の男/ホーンブロー』シリーズは帆船時代の大海原、大冒険。冒険といえばスティーンソンの『宝島』とランサム『ツバメ号とアマゾン号』シリーズは必読です。とまあこんな風に、小説を讀んでいるのは次から次へと他の小説を讀んでゆくことなんです。それが讀書の面白さなんです。と言ったのはウンベルト・エーコという人なんです、この人の書いた『薔薇の名前』がまた面白くて……（以下どこまでも続く）」

# 鈴木邦男

「くちびるに歌を持って」山本有三編著

父親が税務署に勤めていたので2、3年おきに転勤があった。僕が生まれたのは福島県の郡山市だが、その後、青森県、秋田県と回った。小学校4年の時に、秋田県湯沢市の湯沢小学校に転校した。その時、国語の教科書に、「くちびるに歌を持って」が出ていた。客船が沈没し、乗客は真暗な荒海に投げ出される。材木にしがみつき、ひたすら救助を待つ。その時、若い女性が美しい声で歌をうたう。皆を励ます。ただ、それだけの話だ。その挿し絵も覚えている。その後はどうなったんだろう。皆も歌い出し、やがて救助の船が来たのだろう。不思議にこの話だけは覚えている。教科書の他の話は全て忘れたのに。今から考えると、転校を繰り返す自分を、漂流する乗客と思ったのか。でも歌をうたう女性はいなかったのに。最近この出典が分かった。山本有三の『心に太陽を持って』（新潮文庫）に出ていた。爽やかな感動を与える世界の逸話集で、「くちびるに歌を持って」はイギリスの話だ。55年たってやっとと原典に再会した。僕自身、真暗な荒海に投げ出され、歌声を頼りに泳いできた55年だったような気がする。

# 千野帽子

「下駄を彫るひと」三木卓

私の世代なら『ころ』をやっているはずなのですが、記憶にありません。国語の時間には机の下にこっそりアントニー・パージェスの『どこまで行けばお茶の時間』などを隠して讀んでました。  
ガルシンの短篇があったっけかなあ、そういえば『山月記』や鶴外の『舞姫』も教科書で讀んだ気がする。でも授業中の感想が思い出せません。  
いちばん記憶に残っているのは三木卓の「下駄を彫るひと」という掌篇小说だ。回想工ッセイだかわからない断章でした。友人の母のこのことを書いたものです。三人の子どもと同じく満洲からの引揚者で、鑿を使って下駄に飾りを入れる内職をして、三人の子どもを女手ひとつで育てている。中学時代の語り手は、この友人の家に遊びに行き、下駄を彫る彼女が「美人」であることを発見し、きっと娘時代には「相当魅惑的な、男心をひきつけるような美しい人」だったんだろうと終わります。  
いた彼女に会う機会を持つところで終わります。  
小学校・中学校・高校をつうじて、教科書がきっかけで手に取った文学者は、この三木卓だけだったと記憶します。「下駄を彫るひと」は『はるかな町』（集英社文庫）に収録されています。この作者は、男子の青春を書かせたら第一人者なんじゃないだろうか。

# 「こどもWB」

予告

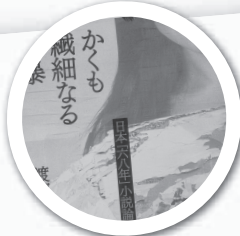
(仮称)

こどもが読んでオトナが読んでたのしめる、図書館も本屋さんもっと身近になる、フリーペーパー「WB」第3期（仮称「こどもWB」）がはじまります♪ 2009年7月配布予定！おなじころに発売の、本誌「早稲田文学3」の特集「コドモの文学」（仮題）もお楽しみに！



わたなべなおみ  
**渡部直己**

「字のないはがき」  
向田邦子



勉強嫌いの中学2年生・祐治のもとへ、ある日、字のないはがきが届く。差出人も不明。祐治はしかし、すぐさま、あのイジワル眼鏡の同級生・幸子の仕業に違いないと同様のはがきを送りつけて、寝る。受け取った幸子は、あたしに気のある馬鹿デブ慎太郎が、とちくるってこんな事をすると見抜き、同様のはがきを慎太郎に送りつけ、見抜いたことに満足して寝る。慎太郎は、さしたる理由もなく級長の彩花に同様のはがきを送り、送ったことに満足して寝る。彩花は、きつと前に教室で恥を掻かせた祐治よ、こんなことするのはと察し同様のはがきを送り付けながらも、いまだに「this is a the pen」なんていっちゃう祐治を少し憐れにおもって寝る。二葉目を手に不審顔の弟の前で、推理小説好きの兄・裕一がはがきを焙ると「い」の字が浮かぶ。兄、破顔一笑、これはつまり、「学」のない奴はいつまでも「がき」ってことさ、せいぜい勉強しろよと諭し、諭したことに満足して寝るが、祐治は不満でさらに焙るうちに、はがきの吹いた火で大ヤケドするという可哀想なお話。

話！

ちのぼうし  
**千野帽子**

「クジャクヤママユ」  
ヘルマン・ヘッセ



清水義範『主な登場人物』は、読んだことがないチャンドラーのハードボイルド小説を、文庫本について「主な登場人物」欄を手がかりに「きつとこんな話だろう」と勝手に空想していく話でしたが、自分でやってみると難しいですね。ヘッセ「クジャクヤママユ」は、きつとこんな話。寄宿学校（ギムナジウム）で学んでいる15歳のウルリヒは、ひよんなことからお金持ちのお坊っちゃんである12歳のハインツと同室にされてしまう。ほんとうは同い年の友人たちと、夜こっそり寮を抜け出して釣りに行ったり、日曜には湖までサイクリングに出かけたりしたかったウルリヒだが、病弱なハインツの世話を押しつけられてしまい、ご機嫌斜め。しかし偶然から、ふたりの共通の興味が博物学、とりわけ鱗翅類の分類にあることを知り、意気投合していく。……これ以上妄想を膨らませたら、学校の近所に美少年の標本を作ろうとする変質者が住んでいて、などとファウルズ『コレクター』のBL版になってしまうのでやめておこう、と思ったところで気がついた。この「クジャクヤママユ」って、《ちくま文学の森》に入ってるじゃん。じゃあ読んだことがあるんだ俺。内容はおろか読んだ記憶さえないので、いまから再読して内容を確かめてみます。きつとぜんぜん違う話なんだろうな。

なかがみのり  
**中上紀**

「ずーっとずっとだいすきだよ」  
ハンス・ウィルヘルム



熊野にある新鹿という海辺の小さな町に子供時代の一期住んでいた。我が家は引越しが多く、その前に居たのはアメリカのサンタモニカだった。新鹿の家に、サンタモニカの小学校で親友だった女の子から手紙が届いた。私はまったく英語が喋れなかったのだが、彼女もクラスで一番無口だから、二人に言語の壁はなかった。父に手紙を見せると、ノリが居なくてとても寂しいって書いてあるよ、と言った。私は返事の代わりに可愛い女の子の絵を描いて送った。その頃流行っていた金髪の女の子の絵。大人になりその目がぱっちりして金髪の子の絵を描いた。大人になりその懐かしい手紙を見つけて、読んだ。「今日、男の子たちに、牛乳のパックを投げつけられたの。牛乳がまだいっぱい入ったままの」父はそんなことひと言も言わなかった。キャンディが泣いている。彼女はキャンディのように金髪ではなかったが、そうだろうとなかろうと、私はずーっとずっと、彼女が大好きだ。

ふるかわひでお  
**古川日出男**

「私は魚か？」  
大庭みなこ



魚たちの声はまだ聞こえていたから、私は魚なのだろう。魚たちの言葉はまだわかるから、私は魚なのだろう。しかし、こうやって水から這い出してしまえば、そうした記憶もあやふやなものになる。こうやって海だか川だかから陸にのぼりだしてしまえば、そうした記憶もあいまい過ぎるものとなる。ほんとうに私は魚か？ いま、私は鰓だけで呼吸しているの。ほんとうは、私はいちばん最初の両生類だ。こうやって上陸した記憶……。うそだ。ほんとうは、私は母の胎内にいるだけだ。私はこれから生まれる。うまれる前は、水のなかのいたのだ。あなたも。わかる？ あなたもそうだ。そのとき、あなたは肺では呼吸していなかった。あなたは魚だった。私も？ いま、私は胎内記憶について語っている。うそだ。私はそんなものを憶えてはいないし、私はこれからうまれようとしているわけでもない。ちがうのだ。私のなかにそれがいる。私は妊娠していて、私はうむ。もしかしたら魚を。もしかしたらあなたを。

この特集に登場するひと

- 中上紀 いろいろな暑い国に旅をした小説を書いているひと。『海の宮』ほか。
- 野村美月 物語を食べちゃう女の子の小説を書いているひと。『文学少女』と死にたがりの進化』ほか。
- 樋口直哉 袋をあたまに被ったひとの小説『さよなら アメリカ』を書いたひと。出張料理人。
- 藤野可織 鳥人間が出てくる小説『いやしい鳥』を書いたひと。恐竜の話も書いている。
- 古川日出男 いつも全力疾走な感じの小説を書くひと。『ヘルカ、吠えないのか?』ほか。
- 枞野浩一 こむずかしくなく短歌を書くひと。『淋しいのはお前だけじゃな』ほか。

- 三田誠広 『いちご同盟』を書いたひと。昔はカゾウカの話も書いてた。
- 村田沙耶香 女の子の成長とか隠してる暗いところとか殺意とかを書くひと。『マウス』ほか。
- 山崎オオコーラ 中年の女教師と高校生の恋愛を書いてデビューしたひと。『手』ほか。
- 米光一成 『ぶよぶよ』を作り、『日本文学ふいんき語り』で小説をゲームにしようと考えたひと。
- 渡部直己 愛と罵倒の評論家。貝が好き。『それでも作家になりたい人のためのブックガイド』等。
- 鶴谷香央理 (イラスト) 『おおきな台所』で第52回ちばてつ賞(準大賞)受賞の若手漫画家。

# 教科書って どんな?



学校って退屈、教科書って退屈……新学期に憂鬱な学生・生徒のひとたちも、学校の記憶の懐かしいオトナのひとたちも、ちょっとひとやすみしませんか。小説や詩や評論を仕事で書いてるひとたちも、むかしは教室で国語の授業を受けてました。そのころを思い出したり、知らない作品を「きっとこんな話だよ」って想像したり……そんなことから、教科書に載る作品が生まれるのかもしれないね。



## ① 読んだことない教科書の小説、きっとこんな

かしまだまき  
**鹿島田真希**

「城之崎にて」  
志賀直哉



「城之崎にて」は、教科書に載っていたが、居眠りばかりして、全然読んでいない。多分こんな話なんじゃないのかなあ。

城之崎はさびれた場所だった。一人の女が、首吊り自殺でしようと思ひ、城之崎駅を降りた。

あーあ。とうとう城之崎まで来ちゃったよ。ここで自殺して、わたしをふったあいつの顔を見返してやるのだ。むふふふ。あいつめ、驚くに違いない。わたしをふったことを後悔するに違いない。あ、でもさあ。驚かすだけだったら。自殺するって、電話で脅すだけでよくねえ? やっぺー。やっぺー。やっぺー。こんな遠くまで来ちゃったよ。とりあえず、電話で脅しとこうかな。でも、宿だよ。宿みつけなきゃ。自殺するつもりだから。なにも考えてなかったよ。つか。帰ろっかな。面倒くせえ。カバン見てみよう。……縄しか入ってねえじゃん!

のむらみづき  
**野村美月**

「ことりをすきになった山」  
アリス・マクレーラン



なんて胸にキュンとくるタイトルでしょう! 山がことりを、好きになっちゃうんですよ! きっと切ない片想いでしょ。

恥ずかしがり屋で口べたの山が、無邪気に飛び回る愛らしいことり、どぎまぎしている様子が浮かぶようです。ことりが朗らかに鳴くのに、うっとり耳をすまし、ことりが楽しそうに遊んでいると、それだけで山も幸せで、ことりが快適に過ごせるように、こっそり木の蜜をあげたり、

の香りのする風を送ったり、木の実や花の蜜をあげたり、きつねやいたちから守ったりするのでしょう。

けれど、どんなに恋しても、相手はことり、自分は山、結ばれることはありません。ことりが別のことりとむつみ合うのを、哀しくあたたかく見つめるのでしょう。

と、そんな風に山の想いをめいっぱい想像し、期待に満ちて読んだ物語は、想像をはるかに超えて、切なく素晴らしかったです!

### この特集に登場するひと

**東浩紀** アニメから哲学まで鋭く論じてニコ動でも人気のひと。『動物化するポストモダン』ほか。

**いとうせいこう** 「天才てれびくん」のメガネのひと。『ワールズ・エンド・ガーデン』ほか。

**伊藤比呂美** 漫画大好き詩人で『バガボンド』のひとと本も出した。『とげ抜き 新集鴨地蔵縁起』等。

**宇野常寛** 「キャラ立ちする秘訣」と文化を結び驚きの本を書いたひと。『ゼロ年代の想像力』。

**角田光代** 若い子からお年寄りまで好かれる小説を書いているひと。『空中庭園』ほか。

**鹿島田真希** 純文学作家だけどBLも大好きなひと。『六〇〇度の愛』ほか。

**柴崎友香** 友だちが集まってお喋りする情景を楽しげに描くひと。『きょうのできごと』ほか。

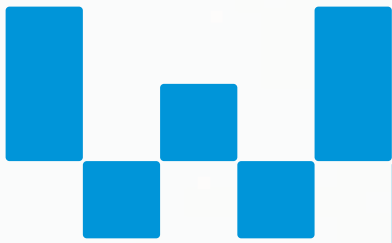
**新城カズマ** ラノベを書いたり、仕事でRPGのGMをするひと。『サマー/タイム/トラベラー』ほか。

**鈴木邦男** ウヨクのエライひと。すごく優しいひと。『失敗の愛国心 (よりみちバン!セ34)』ほか。

**田中りえ** もと「女子大生作家」で、最近20年ぶりに小説を発表したひと。「ちくわのいいわけ」ほか。

**谷崎由依** 少女マンガのように静謐な世界の小説、『舞い落ちる村』を書いたひと。

**千野帽子** ガーリーな小説をたくさん紹介してくれるひと。『文藝ガーリッシュ』ほか。



# WASEDA bungaku FreePaper

vol.016\_2009\_spring

わからん?! 文学

Wonderful BUNGAU

東浩紀/いとうせいこう/伊藤比呂美/宇野常寛/角田光代/鹿島田真希/柴崎友香/新城力ズマ/鈴木邦男/田中りえ/谷崎由依/千野帽子/中上紀/野村美月/樋口直哉/藤野可織/古川日出男/栢野浩一/三田誠広/村田沙耶香/山崎ナオコ-ラ/米光一成/渡部直己

¥0



# 教科書って どんなん? こん げん